
旅路の果て

葉琉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

旅路の果て

【Nコード】

N0267V

【作者名】

葉琉

【あらすじ】

旅芸人のアーリアは、一座とともに、祭が行われる青稜国を訪れる。そこは、彼女が生まれ育った故郷でもあった。だが、2年前のある出来事のせいで“色”を失った彼女が願うのは、少しでも早く立ち去りたいという思いだけだった。ところが、街並を見るうちに忘れたはずの記憶が甦り、アーリアは過去を断ち切れていないことに気付くのだが……。

1・雨

馬車の幌を叩く雨の音が、今日は嫌に頭に響く。

水を弾くように作られているとはいえ、馬車を覆う布は薄い。雨粒が幌を叩く音は、うるさいほどだ。

いつもなら、雨音も――外で強い風が吹いていたとしても誰かが喧嘩でもしていたとしても、気にならないというのに。

横になったのは随分前だけれど、私は眠れずにいららとしているのだ。

きつく目を瞑って耳を塞ぎ、掛布代わりの衣を被って寝る努力をしたけれど、全然駄目。眠ろうとすればするほど、目が冴えてくる。結局、私は溜息とともに、体を起こした。

狭い馬車の中でくっつきあって眠っていたから、動けば誰かを起こしてしまうかと思ったが、杞憂に終わる。

誰一人、身動きひとつしない。

みんなは昼間の疲れで、ぐっすりと眠っているのだろう。

ここにいるのは、大陸中を回る旅芸人の一座の人間だ。祭がある場所を訪れ、そこで歌や踊りを披露して、お金を稼ぐ。今は移動中で、近々大きな祭があるという王都へ向かっているところなのだ。

夕べ、王都に近い小さな村までたどり着き、明日の朝は早く出立する予定となっている。

祭に間に合うように、良い場所を取れるようにと急いでいるから、寝れる時には寝ていないと辛い。

わかっているのに、やはり目は冴えている。

雨さえ降っていないければこんな気持ちにはならなかったのに。耳に響く雨音を恨みがましい気持ちで聞きながら、私は頭を振った。

こんなことばかり考えているのは、きっとよくない。

それに、うずぐずと悩むのは、性に合わない。

そつと立ち上がった私は、寝ている皆を踏まないように、そろそ

ると馬車の出口に向かった。

外と中を遮る布を押し上げると、思ったほど雨足は強くないことに気がついた。

この様子ならば、明日には止んでしまっただろう。

「どうした？ 眠れないのか？」

馬車の影から、寝ずの番を言いつけられていたダデイルの顔が覗いた。

私の気配に気がついたのだろう。小声で囁いて、手招きをする。

「寝られないというか、雨音が気になって」

苦笑しながら馬車を降り、男の近くに移動した。馬車から布を張り出して、ちょうど雨がかからないようにしてある空間は、思ったよりも居心地がよさそうだ。

男の傍においてあった椅子を引き寄せ座る。

「珍しいな。どんな場所でも平気で寝られるお前がさ」

それ、私が鈍感みたいな言い方だ。それでも、見た目よりは繊細なつもりだし、たまにはこんなことだってある。

「何か、あるのか？」

ため息について再び空を見上げた私に、気遣うような声がかけられた。

「そういえば、お前を拾ったのって、このあたりだったよな。故郷だから、思うところがあるのか」

「私には、故郷なんてないよ」

ダデイルの言葉を遮ると、彼が持っていた酒瓶を取り上げた。

それを一息に煽る。「おいおい」と言いながら彼は苦笑したけれど、止めることはなかった。

「行き倒れていたからって、そこが私の故郷とは限らないでしょう」

「それは、まあ、そうなんだけどさ」

故郷だから懐かしいとか、帰りたいとか、そんな奴ばかりじゃな

いのも事実だからなと、ダディルが笑う。

そういえば、前に彼は故郷を追われた身だと言っていた気がする。自分のことだけは誰に聞かれても話さないから、珍しく口にしたその言葉は印象に残っていたのだ。

「どうしても辛いことがあるなら、ちゃんと言えよ。座長も俺らも、仲間が泣くのは見たくない」

「うん、わかってる。……ありがとう」

あの日から。

全てを失ったあの日、私を拾ってくれた彼らは皆優しくかった。詳しい事情も聞かず、私の容姿にも動じず、受け入れてくれた。

それが、どれほどに私を癒してくれたのだろう。

悪夢に魘され、自暴自棄になったときも、決して見捨てはしなかった。苦しい時は励ましてくれて、間違ったことをすれば叱り飛ばしてくれた。

すべてが初めての経験で、家族、仲間とはこういうものなのだと知った。

だからこそ、私は皆に心配をかけたくなかった。

個人的な事情に、彼らを巻き込みたくない。

そんなことを思っていることを知れば、気を使いすぎだと彼らに怒られそうではあったけれど。

私は、徐々に静かになっていく雨音を聞きながら、大丈夫と自分に言い聞かせる。

取り乱すようなことは絶対にしない。

今までの街と同じように、短い滞在で金を稼いで、祭が終われば立ち去るのだ。

きつと、そうなる。

そうしなければ、いけないのだ。

翌日、私たちは、王都についた。

活気に溢れた街は、かつての記憶と変わらない。

この場所を去って、まだ2年。それほど変化を感じられなくても、当たり前だ。

それでも、いくら辺りを見回しても、懐かしいとも思えず、まるで知らない街を歩いているようでもあった。

やはり、もうここは私の故郷ではない。

そのことに安堵するとともに、早く祭が終わってしまえばいいという思いも捨てきれず、私は気持ちを切り替えるように空を見上げる。

けれども、暗く沈んだ空は、帰ってきた私を拒んでいるようで、どうしようもなく胸が痛かった。

2・故郷

露台の上から手を振る人は、明るい光を受けて輝いているように見えた。

辛いこともあったのだろう。

苦しいことも、泣きたくなるようなことも、経験したはずなのに、誰よりも美しい微笑みで、彼女を見るために集まった人たちの歓声に答えている。

その事が、少しだけ救いになった。

「すごい人だね、アーリア！」

まっすぐに歩けないほどの人混みに、隣を歩いているリリは興奮しているようだった。

無理もない。

彼女がここまで大きな祭を見るのは初めてのことなのだ。子供らしくはしゃぐのも当然だろう。

「青稜の国の祭はすごいって聞いていたけれど、想像してたのと全然違う。屋台もいっぱい出てるし」

リリが両手に抱えているのは、屋台で買った焼き菓子や飴が入った袋だ。

皆へのお土産だとは言っていたけれど、恐らくその殆どはリリのお腹に消えていくのだろう。

「それに、巫女姫さま、綺麗だったよね」

目を細めて何かを思い出すように視線を彷徨わせたリリの頭の中では、先ほど神殿前の広場で見た、この国の巫女姫の姿があるのだろう。

「そうだね。とても綺麗だった」

巫女姫の装束を着け、豊かな黒髪を高く結い上げ、宝玉に飾られ

た姿は神々しく、神とともにある娘だと言われれば、誰もが納得しただろう。

この国を治める王でさえ、巫女姫の言葉を重視するというし、今日の祭のために、国中の豪族や重臣が神殿に集まっているはずだった。

神聖にして高貴な女性。

この国で神に仕える巫女の頂点に立つ存在。

だが、普段は、気さくで身分を問わず話し掛けるような人だと私は知っている。そのせいで、昔は神聖さを重視する古参の巫女たちに、自覚が足りないと言われていたはずだ。

「あんな綺麗な服、一度着てみたいなあ」

「……結構重いよ」

「んん？ アーリア、わかるの？」

「想像よ、想像。見た感じでわかるって」

そうかなあと、首を傾げるリリに向かって笑いかける。

「だって、そうじゃない。あんなにジャラジャラ宝石だの飾りだのを服に縫いつけているんだよ。冠だって重そうだし」

服だけでなく、頭には冠以外にも沢山の飾りをつけている。

「それもそうか。きつと、私達がつけている二セモノとは違って、本物だから重いんだよね」

あっているような、間違っているような、微妙に勘違いしたリリの頭をくしゃくしゃとかき回す。

「本物なんて、一つか二つ持ってれば充分」

「だよー。一生もてない場合だってありだもんねー。でも、大事な人からなら、安物でもいいから本物の宝石っていうのが欲しいな」
子供らしい純粹さでそう言われると、それが誰かの受け売りだったのだとしてもそうだなと思えてくる。

古来から、想いを通じ合わせた男女は互いに装飾品を贈り合うという風習があるのだ。

大事な人、か。

遠い記憶が呼び覚まされるようで、心が少し痛んだ。

かつてこの国にいた頃、恋した人がいた。

その恋は一方通行だったけれど、損得抜きで真剣に人を好きになったのは、最初で最後。

男と一時の戯れで付き合うことも知らず、外の世界がどうなっているのかも理解していたなかった頃の、痛くて苦しい思い出だ。

忘れてしまいたかったのに、戻ってきてしまったから、思い出さずにはられない。

だからこそ。

一目見られればそれでいいと思ってリリに付き合ってた広場までやってきたというのに、あの人はいなかった。

巫女姫となったあの人の傍に控えていると思っていたのに。

他の人たちはいる。懐かしい面影を宿す人たちは、皆巫女姫とともに、集まる人々を見ていた。

それなのに、何故あの人だけがないのか。

例え、どんなことがあっても、彼が巫女姫の傍を離れるはずがないのに。

私がこの国を離れた2年の間に何かがあったのだろうか。

……いや。

考えたところで、どうにもならない。

あの人にとっては、私はもういない人間。今更生きていましたと名乗り出たところで、困るだけだろう。

心配だからといって、訪ねることなど出来はしない。

「アーリア？ どうしたの。難しい顔してる」
いけない。

リリが傍にいるというのに、余計なことばかり考えてしまった。そうだ。今は、無くしてしまった過去の思い出に浸るより、今日のことを考えなければならぬ。

「大きな祭でしょ。ナージャの演奏、失敗しないかと考えてたの」
「だよねー。アーリアのナージャの腕は、まだまだだし」

楽器の演奏に関しては、私なんかよりも数倍上の实力を持つリリからしてみたら、私は『まだまだ』らしい。

2年前までは、楽器なんて触ったこともなかったわけだから、そのあたりは仕方ないと言い訳したいところだけれど、一座にいる以上、そういう甘いことは言っていられなかった。

少なくとも、踊ったり歌ったりするよりは、ましなわけだし。

「いっそ、料理番でもした方がいいかも」

「ええ、だってアーリア、料理下手じゃない」

料理だってほとんど自分でしたことなかったし、というのも言い訳か。

ひどく自分が役立たずな気がしてきた。

本当に、料理くらい無理にでも習っておくべきだった。
今更後悔しても遅いけれど。

夜になると、昼間とは違った賑やかさが街を彩る。

私達は、街の中央広場に近い場所に場を取り、歌や踊りを披露していた。

ようやく人前に出てもはずかしくないほど弾けるようになったナージャという弦楽器を膝に抱え、私は辺りを見回す。

見物客の人数は悪くない。

祭りのせいではる酔い気分の人間も多そうだ。

見物客の殆どが男性なのは、中央に立つ露出度の高い服とキラキラと光る装飾品を身につけた踊り子が目当てなのだろう。

彼らの背後にひっそりと佇む薄いベールを被った女を見ているものは1人もいない。

そのことに安堵する。

この一座には、様々な人種や種族の人間がいるけれど、その中でも私の容姿は際だっているのだ。

異様なほどに白く色が抜けた髪と、肌に刻まれた入れ墨のような

文様。薄く殆ど色のない瞳。

一座のものは特に何も言わないけれど、普通の人は大抵驚き、中には侮蔑の眼差しを向ける者もいた。

最初の頃は、そのことに戸惑ったものだけれど、いつのまにかそれにも慣れてしまい、わざと神秘的に見えるように振る舞うことさえある。その方が、お金を稼ぐのに、役立つこともあるからだ。

だから、普段なら、別にベールで顔を隠すということはないのだけれど、私はこの国の出身だ。この国から離れて2年たったとはいえ、顔を覚えている人間もいるかもしれない。

外見や雰囲気は変わっても、親しかったものならば、私が誰なのか見抜くかもしれないのだ。

私は、私がここに帰ってきていることを、誰にも知られなくなかった。

会えば、今の外見のことを聞かれるだろうし、理由も説明しなければいけない。

それだけは、避けたいのだ。

面倒なことになってしまふのはわかってるし、『姉』と『あの』を苦しめることにもなってしまう。あの二人だけには、今の私の姿を見せるわけにはいかなかった。

もし私の状況を知ったならば、悲しむだけではなく、助けようと思おうかもしれない。

あの人達は、優しいから。

自分の事よりも、他人を守ろうとする人たちだから。

2年前には戻れないことも、今の自分が過去に帰りたくないことも、変えようもない事実だけれど、それでもあの人たちは私の力になろうとするだろう。

もう、なにもかも、どうにもならないことなのに。

踊り子に合わせ、ナー ज्याを演奏しながら、私の脳裏には、かつ

ての懐かしい光景が蘇っていた。

全ての始まりだった、あの日。

私がまだ、多くのこの国の人々と同じように、白い肌と黒い髪を
持っていた頃。

あれは、今日と同じ、祭の日の朝のことだったのだ。

3・昔日（一）

あの人と初めて会ったのは、十になったばかりの夏の日のことだった。

その頃、私は今とは違う名前を名乗り、町外れの小さな屋敷に、ミズナという女性と二人で暮らしていた。

女だてらに剣を奮うその人とは、物心ついた時から一緒にいたのだけれど、私と血縁関係にあったわけではない。

見寄のない私を引き取って育てているのだと彼女は言っていたし、あの頃の私はそれを信じていたのだ。

穏やかで平凡な生活だったと思う。

普段からミズナは忙しい人で、一緒にいる時間は少なかったけれど、数日に一度やってきて勉強を教えてくれる年老いた男性と、通いで屋敷内の細々としたことをしてくれる中年の女性がいて、淋しくはなかった。

本音を言えば、同い年の子供と遊びたかったというのはある。けれど、ミズナは私が街へ行ったり、友達を作ったりすることをひどく嫌ったのだ。

一人で出かけることは許されず、偶に出かける時は、必ずミズナが一緒だった。

あの頃の私は素直だったから、ミズナの言葉に従っていたけれど、おかしいことだとは思っていた。身分の高い者ならわかるが、自分はいごく平凡な少女だ。

誘拐してお金を取るにしても、生活は質素で屋敷内に値打ちのある物があるわけでもないから、高額な身代金なんて払えそうにもない。拐かして、どこかに売り払ってしまうという話を聞いたこともあったけれど、それは大抵容姿の綺麗な子供ばかりだから、私には当てはまらなかった。

それでも、ミズナは神経質な程に、私の外出を制限していたのだ。

今思い返してみれば、彼女は、無力な養い子を世の中にある悪意から守りたかったのだろうと思う。

誹謗や中傷。口さがない噂。

ミズナの元を離れてから何度も聞かされた言葉を、幼い頃知らずにいられたのは、ミズナのおかげだ。

同じような理由で、人を屋敷内に招き入れることも、殆どなかった。

もっともこれに関しては、ミズナはいつも忙しくて、人を呼ぶ余裕がないというのも大きかったと思う。

彼女の仕事は、屋敷の裏にある森の管理および監視だった。

私も立ち入りは禁止されていたから、実際に何があるのかは当時知らなかったけれど、国にとって、とても大切なものがあり、普通の人間は入ってはいけないのだと、教えられていた。

それならば、兵士でもなんでも雇って大がかりに守ればいいのにと尋ねれば、森に入れるのは特別に許された人間だけなのだと言う。それゆえに、森を手入れたり増えすぎた動物を狩ることも、限られた人間のみしか行えなかった。

その『特別な人間』というのがどういうものを差すのか当時の私はわかっていなかったから、あまり深く考えることもなかった気がする。

どちらにしても、ミズナは毎日忙しくて、ここ数ヶ月はずっと屋敷の敷地内に籠もりきりだった。

でも、その日は、街で祭があったのだ。

1年に一度、街で行われる大きな祭で、この国を作った遠い昔の王様とそれを助けた巫女を称えるために始まったと言われている。近隣の街や村、遠い異国の旅人まで訪れるほど、有名でもあった。

祭には数回しか行ったことはないけれど、子供の時感じた印象は鮮明だ。街は色とりどりの花で飾られ、たくさんの屋台が並び、芸人や綺麗に着飾った人が通りや広場に溢れていた。

きらきらと輝く飾り玉に、夜通し灯される明かりが反射している

ところや、1日に数度顔を見せる当時の巫女姫の美しい姿は、どこか違う世界を眺めているようで子供だった私はひどく興奮したものだ。きよろきよろと辺りを見回してばかりだったから、ミズナに何度迷子になるから気をつけろと注意された。

それに、祭の夜だけは、子供だって夜更かしをしていいことになっている。

普段なら寝台に潜り込んでいなければならない時間が過ぎてても、その日はミズナは何も言わなかった。

小言を言う代わりに、屋台にあるもので何か食べたいものはあるかと聞いたりもしたのだ。

あまりお金はないから、それほど沢山のものを買えたわけじゃないけれど、屋台で売っていたお菓子や果物は、普段よりもずっと美味しく感じられ、嬉しかったし楽しかった。

だから、ミズナに今年も祭に行きたいと頼んだのけれど、あつさと断られてしまったのだ。祭になど行く必要はないと怒られもした。

それきり仕事に行くとして出てしまったから、私もふてくされて屋敷の外に飛び出した。けれど、一人で街まで行くのも怖くて、庭をうろつくと歩き回るしかできなかった。

そんな時だったと思う。

普段は誰も来ないはずの、屋敷へと続く細い道を歩いてくる人影を見つけたのは。

歩いて来たのは、少年だった。

私より幾つか上に見えたのは、背筋を真っ直ぐに伸ばし、迷いもなく歩いてきたせいなのかもしれない。帯刀しているのは、それなりの身分の人間か、武官か兵士だけだ。凝った装飾品は付いていないけれど、一般の兵士が持っているような簡素な造りではないから、身分は高いのかもしれない。

だから、最初に考えたのは、ミズナの客だろうということだった。どういつ繋がりがあるのかわからないけれど、時々身分が高そうな人間が屋敷にやってくる。

若かったり年寄りだったり男だったり女だったりするけれど、そう言う場合、大抵私は屋敷の外に出され、用事が終わるまで中には入れてもらえない。

彼もそうなのだろうか、声を掛けようと近づいた。

お客ならば、ミズナを呼ばなければならぬわけだし。

「何故、子供がこんなところにいる」

だが、彼は私の姿を見つけると、いきなりそう言った。

まっすぐに射抜くような眼差しに、思わず私は数歩後ろに下がってしまった。

「ここは、一般の人間の立ち入りは禁止されている」

冬に降る雪よりも冷たいんじゃないかと思う声で、さらに彼は言った。

「遊びに来たのなら、さっさと立ち去ることだ」

私よりも背が高い上に、偉そうな物言いで見下ろされ、私はますます縮こまってしまう。

「こ、ここが私の家だからだもの。いてもおかしくないもの」

ようやくそう口にしたが、声は震えていたのだろうと思う。涙が出そうになっていたはずだ。

ミズナに怒られるよりも怖かったのは確か。

「君の家？　ここが？　子供がいるなんて聞いてないぞ」

少年の目はつり上がり、声も威圧的で、殆ど他人と接したことのなかった私が反論など出来なかったとしても仕方がない。

「この子は、うちの養い子だよ」

いつのまにか、私の後ろに来ていたミズナがそう言うてくれなければ、大声で泣き出すか、走って逃げたのではないかと、今でも思う。実際、その時の私はミズナに駆け寄り、その後ろに隠れた。

「あまり怖い顔で睨まないでやってくれないか」

ミズナもしがみついて離れない私を庇うように、頭を優しく撫で
てくれていた。

反対に、少年の顔は険しいままだったけれど。

「ミズナ殿。まさか、本当にこの子は、あなたの養い子なのですか」
まだ疑いが消えていないのか、少年はしつこかった。もっとも、
その時の私は、ここがどういう場所から知らなかったから、彼がど
うしてこんな態度を取るのか、わからなかったのだ。

「そうだよ」

「しかし、ここへは一般の人間はいてはいけないはず」

「巫女姫は知っていることだよ」

「……それでしたら、かまいませんが」

ため息とともに、少年は言い、それきり私の方は見ない。まっす
ぐに背筋を伸ばし、ミズナを見つめる。

「書簡を預かってくるようにと言われて参りました」

「聞いているよ。あの人も人使いが荒いね。少し待ってな。すぐに
取ってくるよ」

そう言つて、私から手を離すと、体を引きはがし、森に向かって
歩き始めた。

「悪いが、こいつの相手をしてやってくれ」

その時ほど心細いと思ったことはなかった。

こんな意地悪な少年と一緒にいるなんてとても耐えられないと思
った。

事実、取り残された私と少年の間にある空気は、気まずいという
ものではなかった。

会話もなければ、互いに目を会わせることもない。

「あの」

勇気を出して声をかけたのは、沈黙に耐えられなくなった私の方
だった。

「私の名前は、カナだよ。あなたは？」

「……アキトだ」

嫌そうにそつぽを向いたまま、それでも少年は答えてくれた。

見た目よりは律儀な性格なのかもしれないと思ったら、少しだけ怖くなくなったのだから、本当に人の気持ちというのは不思議だ。

そんなことがあってから、アキトはよくミズナを尋ねてくるようになった。

その殆どが、何かの書簡を取りに来るというものだったが、すぐには帰らず、私の相手をしてくれたり、一緒に夕食を食べたり、街での話をしてくれたりもした。

ミズナと奥の部屋で話し込んでいるということも、多かったように思う。

そつという穏やかな日が続いてくると、アキトがいる生活も当たり前になってくる。

最初は怖いと思っていた言葉遣いも眼差しも、生真面目さ故のものだと分かってくると、怯える理由もなくなっていく。

自覚はしていなかったけれど、その頃から、私は彼に仄かな恋心を抱いていたのかもしれない。

もっともその時は、年の近い友達が出来て嬉しいというだけだと思っていたのだけれど。

*

*

*

最後の曲を演奏し終わったのは、真夜中をとくに過ぎた頃だった。街から人の姿が消え始め、通りを歩いているのは、酔っぱらって足下が覚束ない者が、家路を急ぐ者ばかりだ。

私達の芸を見るために立ち止まる人間も少なくなってきたから、今日はこれでおしまいだと、座長が残っている少ないお客に頭を下げた。

やがて、客が消え、口々に「お疲れ様」の声が飛びかいはじめると、各々が片付けを始める。

もちろん祭りはまだ続くから、舞台はそのままに、必要なものだ

け持って帰るだけなのだけれど。

「アーリア、お疲れさま！」

普段とは違う派手な衣装を身につけたリリが、自分の丈ほどの楽器を抱えながら近づいてくる。

「どう？ 今日はずまく演奏できたでしょう」

笑いながら私は腰に手を当てるが、リ－リアはうーんと唸った。

「どうかなー。普段よりは弾けていたと思うけれど」

「いい加減、合格点頂戴よ。リリ、厳しすぎない？」

戯けたように言つと、周りにいたみんなも一緒に笑う。ここにいる全員が、どうしようもなく下手だった頃の私を知っているからだ。

「そうだが、リリ。曲が弾けるようになっただけでも大進歩だ」

「途中で、二つの曲がごっちゃになってたコトもあったよねえ」

「あの時は、踊ってる私がヒヤヒヤしたよ」

ちやかしながらも、皆の視線と言葉は優しい。

厳しい言葉を口にすることも多いけれど、辛い時側にいて、甘えたい時には思う存分甘えさせてくれた人たちだ。

「次の舞台は、びっくりするくらい素晴らしい演奏をしてみせるんだから」

私が言つと、優しい微笑みが返ってくる。

本当に、この人たちは、私を甘やかしすぎだ。

片付けが済んで宿に帰ると、皆は寢床へとすぐに潜り込んでしまった。

私はといえば、疲れているのはわかっていたけれど、眠る気になれない。

故郷にいるせいだろうか。懐かしいとは思えなくても、あちこち見るたびに、心の奥が疼いたように傷む。

私は溜息とともに、入ってきたばかりの扉を見つめた。

きつと、今の時間、街の中は、人の行き来も少ない。

誰にも会わずに、街の中を見て歩くことも出来るかもしれない。

「ちよつと散歩してくる」

入口にいた一座の人間に声をかけると、静けさを取り戻した街へと私は向かった。

4・昔日（二）

街は、最後に見た時とあまり変わりはないように思えた。

石畳の大通りも、中央の広場にある噴水も、昔と同じだ。今は深夜だから静かだけれど、朝になれば、たくさんの人で活気づく。

この先の道をまっすぐ歩き続けると、神殿だ。

この国の神を祭る巫女姫と、それに仕える巫女たちが住まう場所。街の中心に位置するのは、彼女らの存在が国の中枢に深く食い込んでいるからだ。巫女の神託は絶対で、王さえもそれに従う。

巫女たちは皆どこかしらで血が繋がっており、一生を神殿で過ごすのが常だ。結婚することは許されているが、生まれた子供が女の子ならば、神殿に引き取られ、そこで育てられる。

巫女の頂点に立つのは、巫女姫と呼ばれる女性で、巫女の中から特に力の強いものが選ばれる——表向きは。

歴代の巫女姫の中には、力ではなく、父親が誰かによって選ばれたものもいたらしいから、絶対というわけでもないということなのだろう。

どちらにしても、この国では巫女という存在は特殊で特別だ。

誰でもなれるわけではない。前提条件として、母親が巫女でなければならぬという決まりのようなものがあつたし、巫女の娘として生まれれば、なりたくないといってもならざるを得ない状況なのである。

そういう理由があつて、神殿で暮らす巫女には規律も多いが、自由がないわけでもない。重要な式典や儀式以外では、外に出ることも許されていたし、よほど高い地位についていなければ、護衛もなしで抜け出してもきつく咎められることはなかった。

もっとも、実際に神殿を抜け出して街で遊んでいた者は、そう多くはない。巫女としての力が弱く上の地位に上がれないものや、神殿になじめないものが殆どだ。

「自分も、だつたけれど」

私は、自嘲気味に笑ってみた。

そう——私は少女だった頃、短い期間だったけれど、神殿で巫女として暮らしていたのだ。

もう随分前のような気がするけれど、それほど昔のことではない。神殿を出てからたつた3年しかたっていないのだ。

あれは、幾つの時だつたらうか。

少なくとも、13歳にはなっていなかった気がする。

ミズナと私だけだった世界にアキトが加わり、少しずつ世界が変化していった頃でもあった。

相変わらずミズナは忙しくて私の相手どころではなかったけれど、それでも穏やかな生活が続いていたのだ。

将来のことも、まだ深く考えていたわけじゃない。そのうち誰かと夫婦になり、子供を産み、平凡に生きていくのだと、漠然と思っていた。身分が違うから、もちろん結婚するのは無理だけれど、アキトのような人が相手だったらいいなと、考えたこともあった。

けれど、まだ私は12才で、色恋どころか、アキト以外の若い男性と話したことさえない。

全ては、遠い未来の話で、現実味のない夢のようなものだったのだ。

そんな時に、屋敷に見知らぬ人間がやってきた。

初めて訪れる男だったけれど、服装から神殿の人間なのだと知る。同じような格好をした人を以前見たことがあったからだ。

彼は、私を頭から足の先までゆっくりと眺めたあと、丁寧な口調で神殿から使者だと告げた。

男の不躰な視線を不快に思いながらも、私はいつものように、ミズナを呼びに行った。

ミズナと客が話している間は外にいる。それがミズナとの約束事

だったから、そのまま屋敷から出ようと私は裏口へ向かったはずだ。そんな私をミズナが呼び止め、硬い表情のまま、この場に残るようと告げた。

いつもと違う様子に、いったいどうしたのかと、不安な気持ちがかみ上げてきたのを覚えている。

ミズナの顔も無表情なままで、その様子は怖かった。そして。

重苦しい雰囲気の中、その使者は私に、運命を変えてしまう事実を突きつけたのだった。

「あなたには姉がいる」と。

私はずっと、自分には血の繋がった両親以外の身内はいないと信じていた。

ミズナからも、血縁者がいるとは聞いていなかったし、もしいたとしても、今まで一度も会いにこないような人なら、私にとっては大切でもなんでもないと思っていたからだ。

それなのに、突然やってきた神殿からの使者は言う。

「あなたの姉にあたる方が、会いたいと言っている」と。

最初は、何を言われているのかわからなかった。

頭が真っ白になってしまったというのが正しい。

そもそも姉なんて言われてもぴんとこなかったし、それを何故今頃になって男が伝えるのかも不思議だった。

ミズナは何も言わない。

私も言葉が出なかった。

私はびっくりしすぎて何をどうしていいのかわからなくなっていたわけだけれど、ミズナはどうだったのだろうと、今になって思う。知らなかったわけではないと、この後の会話で私は知ったのだけれど、ちらりと盗み見たミズナの顔は無表情で、視線はどこか違うところにあった。

そんな私たちの様子に使者はいらついたようだ。落ち着かない様子で、何度も手をすりあわせていたことが、印象的だった。

だが、その時の私に何を言えというのだろうか。

姉がいたことが嬉しいと？

姉の使いというその男は神殿に仕えているのだ。姉は巫女の身分を持つてしていると推測するのは容易い。もし男の話が事実ならば、身内に巫女がいることは自慢にもなるし、だから喜んで当然だぐらいには思っていたのだろうか。

生憎、私には神殿自体が遠い存在だったし、信心深いほうでもなかったから嬉しいよりも途惑いの方が大きかった。

「驚くのも無理はない。こんなことを言われて、すぐには受け入れられないかもしれないが」

私が黙り込んでいるのをそう解釈したらしい使者の言葉に、まず私は何も言えなくなった。

「わけあって、今まであなたの姉君は妹がいるということを知らせていなかったのだ」

姉のことは正直どうでもよかったけれど、『わけ』というのが気になった。血の繋がらないミスナに預けられていたことや、街への一人きりでの外出が禁止されていたことなど、よほどの理由があるのではないかと、さすがの私にもわかったからだ。例えば、私の本当の両親のこととか。

「あなたさえよければ、是非会ってもらいたい」

言葉だけはお願という形をとっているが、拒否できるような雰囲気ではない。

使者の答えを待つ視線に耐えられず、思わずミスナの後ろへ隠れてしまった。

そこでようやくミスナが口を開く。

「私かとやかく言うことではないとは思っけれどね。何故今頃になつて、この子のことが漏れたんだ？ いや、それよりも、あんたは肝心なことを言っていないね」

冷ややかな口調のミズナは、男の睨み付けたままだった。

「あの方は、このことを知っているのかい？」

「それは…」

明らかに使者は動揺していた。

同時に、私の関心事は、姉よりも『あの方』に移っていた。『あの方』とは誰なのだろう。

『姉』ではないのだと思った。それならば、ミズナは曖昧な言い方はしないだろうから。

「私は許可できないよ。あの方が何も知らないというのなら、会わせるわけにはいかない」

「それを決めるのは、あなたではない」

「その言葉を、そっくり返すよ」

二人は一触即発という感じで、当事者であるはずの私のことなど忘れてしまっているかのようにも見えた。

「とにかく、この子は、私の大事な養い子で、普通の子供なんだ。力だつてない。あんたらの余計な争いに巻き込まないでくれ」

「別に巻き込もうと思っっているわけではない。ただ、会いたいと」

「それが、余計なことだというんだよ。この子は、普通の子だ。平凡な結婚をして、平凡に生きていくんだ。その約束で、私が引き取った」

ミズナの手が私の体を引き寄せて、力を込めた。その手は温かくて気持ちが少し落ち着いたように思う。だから、私も自分の手をミズナの手に重ねて、握り締めたのだ。

「だから、帰ってくれ」

これで話は終わりだとばかりのミズナに、使者はまだ何か言いたげだったが、結局は追い返されてしまった。

「驚いただろう」

使者が帰った日の夜、ミズナは私に謝った。

「あんたの意見も聞かず、追いつ返しちまった」

本当に申し訳なさそうに謝るから、私はミズナの顔を見つめ返してしまった。

「本当のことが知りたいなら、話す。けれど、聞きたくないというのなら、何も言わないよ」

「聞きたい」

何故そんなことを言ってしまったのか。

聞かなければ、知らなければいいと思うのに、やはり気になったのかもしれない。

私を人に預け、一度も会いに来ることはなかった肉親の、その理由を。

「教えて。別に会いたいわけじゃないけれど、気になるから」

その時のミズナは、不思議そうな顔をしていた。私があまりにも淡々とした態度だったから、驚いていたのかもしれない。

それでも、視線を会わせるように腰を屈めると、しっかりと私の目を見る。

「カナ。あんたには半分だけ血の繋がった姉がいる。……母親も生きている」

「父さんは？」

「カナが生まれる前に死んだらしい。あんたの父親のことは、正直私にはわからないんだ。知らされなかったからね」

「私の姉さんや母さんは、巫女なの？」

「そうだ。生まれた時から、神殿で暮らしている」

普通、神殿で生まれた女の子はそこで育てられる。だから、私も本来ならば、神殿で暮らしていなければならなかったのだ。

それが許されなかったということは、どういうことなのだろう。父親に問題があったのだろうか？ それとも母親の方？

あるいは両方かもしれない。

「私がミズナに引き取られたのはどうして？」

その言葉を口にした瞬間、ミズナの顔が歪んだ。

ああ、聞かれたくなかったことなのだなと思ったけれど、一度言ってしまった言葉は取り消せない。

それに、一番知りたかったのは、そのことだったのだ。

「大人の世界っていうのはね、綺麗なもんじゃないんだよ。あんたが神殿の外に出されたのは、言ってみれば権力争いってヤツだ」

一見神聖な場所に見えるけれど、実は神殿だって他の場所と変わらない。

権力争いもあれば、派閥もある。

もちろん、その時の私には、ミズナの言っている事は半分もわからなかった。

「あんたの母親には娘がもう一人いる。さっきの男が言っていたあんたの姉だ。その子が生まれた時、身分的にも後ろ盾的にも、後を継ぐのはその子だろうと誰もが思った。そこに、もう一人娘が出来れば、どうなると思う？　ろ盾である存在を疎ましく思うものも大勢いるからね。血筋的には問題ないから、誰かがあんたを担ぎ上げて、神殿内が荒れるかもしれない。それをあんたの母親は恐れたんだよ。生まれたあんたに力はなかったが、それでもあの人の娘っていうのは大きいんだ」

普通、巫女は子供を何人産んでも、特に身分が変わるわけではない。位があるとはいえ、世襲制ではないのだ。

そんな巫女達の中で、権力争いが絡んできそうな人は誰か。跡を継ぐという言葉が出てくるのは誰か。

はつきり口に出さなくても、それが誰なのか私でもわかることだった。

けれど、そうあって欲しくないと思うから、ミズナに確かめるために質問する。

「ねえ、ミズナ。私の母親って誰なの？」

「……巫女姫、だ」

巫女姫。

この国で王と同等かそれ以上に敬われている存在。

「冗談じゃなくて？」

「本当の話だ」

実感がわかなかった。そんなすごい人たちが身内だなんて、やっぱり信じられない。

「あんたの姉にあたる人は、悪い子じゃない。あんたに会いたいというのは、本心からだと思う」

「ミズナは、会ったことがあるの？」

「ああ。少しばかり頼りないところはあるが、優しい人だ」
「いったいどんな人なのだろう。」

興味はあったが、やはり遠い世界のことにはしか思えなかった。いきなりすぎて、その時の私は、すっかり考えている様に見えて、やはり混乱していたのかもしれない。

どうしたらいいのか、どうするべきなのか、結論を出すことが出来なかったのだから。

「あんたの好きにしていいいんだよ。会いたいのなら、堂々と会えばいい」

そう言ってミズナは寂しそうに笑った。

それが本心でないことは、ミズナの目をみたらわかることだった。もし私が巫女姫の娘だと多くの人に知れば、いろんなやつかいな事が出てくるのだろう。

結局、そんなミズナの態度が、私の心を決めさせた。知らない姉や母よりも、ずっと私を育ててくれた彼女の方が大事で、悲しい顔など見たくはなかった。

だから、私は言ったのだ。

私の家族はミズナだけで、姉になど会いたくはないのだと。

その意志を数日後にやってきた使者に伝えと、苦い顔をしたけれど、彼は何も言わず、姉に会うという話は立ち消えになってしまった。

ほっとしたと同時に、やはり姉を名乗る人にとって、私はその程度の存在だったのだと落ち込んだのも覚えている。

だが、全てはそれで終わりではなかった。
結局、私は姉に会うことになってしまったのだから。

その出来事から数日たった頃、ふいにアキトが尋ねてきた。
久しぶりに屋敷にやってきた彼に、私は喜んだ。

彼は、いつもお土産に美味しいお菓子を持ってきてくれる。それが楽しみでもあり、私は彼が来るのを心待ちにしていたのだ。

もちろん、彼がやってくるのは、ミズナに大事な用事がある時だ。その用事が済まなければ、私は遊んでもらうことはできない。

だから、いつものようにミズナを呼んでこようとしたのだけれど、彼は私を引き留めた。

「いや。今日はミズナ殿ではなく、カナに用事があるんだ」
「私？」

聞き返してしまったのは、それが初めてのことだったからかもしれない。

ミズナから、アキトは有力貴族の子息だから、若くても役目を持つているのだと聞かされていた。真面目な彼は、その役目をととても大切にしていて、それが終わらなければ、休息さえ取ろうとしない。ミズナにもよく堅物すぎるとからかわれていたはずだ。

そのたびに真面目な顔をして反論するアキトを面白がって見ていたのは、私もだったけれど。

そんな彼が、私にだけ会いに来たというのは不自然だった。

「君に合わせたい人がいる」

その時感じた感覚は、なんだったのだろう。

嫌な予感、というのとも違う。胸の奥が、うずくようにざわつき、不快な気持ちになった。

「だれ？」

思わずそう口にしたのだけれど、私自身の体は警戒するように彼から少し離れてしまっていた。

「君に縁のある人だ」

「えん…？」

「以前、話を聞いているのではないかと思うのだが」

前に話を聞いていて、私と縁がある人というのは、1人しかいないと、わかってしまう。

「……おねえさん……」

呟いた声に、アキトが笑ったような気がした。

あれはどんな意味の笑顔だったのだろう。

姉のことを知っていたことに対してなのか、途惑っている私を安心させるためだったのか。

「そうだ。彼女が君が会いたいというので連れてきた」

そこで、ようやく私は少し離れた場所に立つ人影に気が付いた。

薄茶のフード付きの上衣を身につけ、少しうつむき加減のせいで、顔はよく見えない。

アキトが振り返り、彼女に呼びかけるのをぼんやりと眺めながら、護衛もなしでこんなところにくるなんて、随分無防備な人だなと考えたのも、優雅にこちらに近づいてくる姿も、鮮やかに覚えている。自分とはまるで住む世界が違う人だと、思った。

身に纏う雰囲気も、仕種一つをとっても。

言葉を発することも出来ず、呆然と近づく人を見つめていたら、

アキトが私の顔を覗きこんだ。

「どうした？」

困ったように笑いかけてくれたような気もするけれど、本当のところは、そのあたりはよく覚えていない。

彼女が私の前まで来たとき俯いてしまっていたから、そのせいかもしれないなかった。

「顔をあげて？」

優しい声に、すぐに動くことはできなかった。『姉』がどんな人なのか、知るのが怖かったからだ。

「あなたが、カナね？ 私はマヒロ」

はじめまして、と声が聞こえ、白い手がそつと私の頬を撫でた。
「私に妹がいるとわかって、本当に嬉しかったの」

ようやく顔を上げた私が見たのは、美しい姉の顔だった。
自分とはまったく似ていない。同じなのは、黒い髪だけだ。目の色も、彼女が明るいつ茶色なのに比べ、私は暗く濃い茶色だった。

本当に、私達は姉妹なのだろうか？

母親——巫女姫も、美しい人だった。

姉と母はよく似ている。親子だと言われれば、納得できるだろう。
私では、きつと血が繋がっていると信じてはもらえない。

それなのに、この人は迷うことなく私を妹だと言う。

「皆は会わせないようにしていたけれど、私は会ってみたかったから。だから、アキトに頼んで、こっそり抜け出してきちゃった」

「俺は、一応反対したんだが」

二人が視線を合わせて笑う。

その親しげな様子に、私はますます言葉を失ってしまった。そこにいるのは、私の知らない表情を浮かべるアキトだ。今まで、一度だって、こんなに優しく笑う姿を見たことはない。

「マヒ口。いつまでもここにいてるわけにはいかないな。ミズナ殿に事情を話して、中に入れてもらおう」

「わかった」

二人の間で、どんどん話が進んでいくのをぼんやりと眺めていると、二人は家に向かって歩き出す。

「どうした？ カナ？」

立ち止まったままだった私は、その言葉に我にかえた。少し先で、アラトが呆れたような顔で私を見ている。

慌てて追いかけようとする、足がもつれて転んでしまう。

「カナ。危ないから」

そう言って手を差し伸べられたのだけれど。

「……うん」

返事をしたあとも、心の中は重く暗かった。

彼の手から目をそらし、一人で立ち上がったのは、ほとんど無意識の行動だ。

「カナ？」

途惑ったように名前を呼ばれて、「大丈夫」と視線を合わせないまま答えた。

「大丈夫ならいい。だが無理はするな」

そう言ってくれたアキトの声はいつものように優しくなかったけれど、ひどく遠い存在に思えて仕方がなかった。

この日以来、『姉』はよく私を訪ねてくるようになった。

大抵アキトと一緒に、帰る時も二人だ。

護衛も付けずに大丈夫なのかと思ったけれど、姉はそういうことはあまり気にしない性格だったらしい。振り回されるアキトが気の毒だと最初は思ったが、律儀についてくる彼を見ているうちに、本当は嫌なわけではないのだと気が付いてしまう。

子供心に、二人の間には入れないと理解しはじめたのもこの頃だ。姉は優しく気さくだったから、会話は楽しい。

けれど、いつだって彼女が帰った後には胸が痛くなって、この頃から、夜一人でいると、溜息ばかりつくようになってしまった。

5・昔日（三）

神殿への道に背を向けると、私は大通りから北へ向かって伸びる道へと足を向けた。

北にある大きな森へと続く道だ。

かつて、祭りの後、ミズナと一緒にここを歩いた。まだ祭は終わっておらず、人混みの中、ミズナからはぐれないように必死で歩いたことを思い出す。

森までは一本道だ。

やがて、少しずつ家がまばらになり、道は緩やかに登り始める。坂を半分ほどいけば、遠くに森の黒い影が見え始めるだろう。子供の頃は、随分長い道のりに感じたものだ。

この坂を登り切れば、懐かしい屋敷が見えてくるということろで、私は足を止める。

神殿に行くまでずっと住み続けていた屋敷は今でもあるのだろうか？

ミズナはどうしているのだろう。

相変わらず忙しくしているのだろうか？

考え始めると胸が痛くなる。

最後に会ったとき、ミズナがとても疲れた様子に見えた。

いつもの快活さは形を潜め、憂鬱そうに顰められた顔は細く、痩せたのではないかと思っただのを覚えている。

訳を聞きたかったけれど、神殿にあがってしまった私は、そう頻繁にはミズナに合うことは出来ず、抜け出して会いに行っても、「心配ない」を繰り返すばかりだったのだ。

私が神殿で苦勞していることを知っていたから、あえて何も言わなかったのだらうと、今なら分かるけれど、当時は何も言ってくれないことの方が拒絶されているようで、辛かった。そうだ。

今になつてわかることなら、他にもある。

ミズナが誰も入らないように監視していた森の奥に何があるのか。何故、あの時ミズナが悩んでいたのか。

私は子供だから知らなかったけれど、あの頃、国は病んでいて、ゆつくりと滅びに向かつていたのだ。

年々、雨の量が減っており、農作物に被害が出ていた。

飲み水だって簡単には手に入らず、高いお金で取引されていて、たし、食べ物にしてもそうだ。気が付くと徐々に農作物は値上がりし、下がる気配もなかった。

だからなのかもしれない。

『あの人』が、私を神殿に引き取ると言い出したのは。

私を道具として使うために。

それだけのために、『あの人』は私の前に現れたのだろう。

そして、本当の意味で私が『道具』だったのだと知ったのは、ずっと後になつてからで、その時の私はまだ何一つ真実などわかっていなかったのだ。

* * *

神殿へ上がるという話が浮上したのは、13歳の誕生日を間近に控えた頃だった。

いつかの時と同じように神殿の使者が現れ、一方的に、成人の議を神殿で迎え、そのまま巫女として神に仕えるようにと言われたのだ。

前と同じように突然の訪問だったが、違ふのは、巫女姫の名の下に発令された正式な文書を手にしていたことだった。

拒否などありえない。

命令なのだから。

理不尽なことに怒りを覚えながらも、結局私はミズナと離れ、神殿に行くしか道はなかったのだ。

そうやって無理矢理連れてこられた神殿での生活については、実はあまり語りたくはない。

姉はよくしてくれた。

巫女姫の娘と正式に認められたということで、扱いも悪くはなかった。自由もある程度あったし、面と向かって私を悪く言う人もない。

けれど、居心地は悪かった。

誰もが私と表面的な付き合いしかない。

巫女姫とも姉とも似ていない娘だ。

口さがないものたちが私の父親のことを上げ、影でいろいろ言っていたのも知っている。

巫女姫の最初の夫を暗殺した男だとか、身分の低い部族の出身だとか、戯れに巫女姫が相手をした行きずりの男だとか。

数え上げればきりが無いほどの、父親に関する噂を知っている。

最初の頃は反発もしていたけど、そのうち皆がいろいろなことを言うのは、まったく父親の素性がわからないせいだと気が付いた。

夫が死んで4年後、巫女姫が子供を授かったというのは間違いはない。

複数の人間が確認しているし、その時生まれた子供が私だということも確からしい。

ただ、相手だけがわからなかった。神殿の奥の宮——実際に巫女たちが生活する場で、巫女姫の側近くに男がいたかどうかは、誰も知らなかった。気配さえ、感じられなかったのだという。なのに何故？と、神殿内は大騒ぎになったという話だ。

当の巫女姫は周りのあわてふためく様など無視し、誰の問いにも答えず、生まれた子供はすぐにミズナの元へと預けてしまった。

それ以降、父親に関してだけは、巫女姫は絶対に口にしない。何故なのかは、本人だけにしかわからないことだろうけれど、神殿内はかなり揺れた。

生まれた娘の父親が分からないだけでなく、慣例を破って、巫女

姫が私を外へ出したからだ。

私の存在を知るものはごく一部だけれど、巫女姫のしたことに異議を唱えた者も多かったという。『巫女』を普通の娘として育てることなどありえない、例え力がなくとも巫女姫の娘だとわかれば、利用しようとするものも出てくる。そう何度も彼女に進言したが、聞き入れなかった。

ならばと、貴族たちに事情を話して預ければと言えば、それも嫌だと言う。

それどころか、誰に預けたかさえ、秘密にしたらしい。

そんな経緯があつたせいか、神殿に上がった時に巫女姫とは一度間近に顔を合わせたくらいで、その後は祭礼以外で姿を見ることがなど皆無だった。口を聞くことなどもない。

だからなのだろうか。

皆が無関心だったせいで、思っていたより私は自由だった。

よく抜け出して街へ遊びに行っていたけれど、課せられた課題をきちんとこなしていれば、咎められることは殆どなかった。おかげで、嫌なことがあつても気を紛らわすことが出来たのだ。

そういえば、抜け出した先で、時々姉を見ることがあつたな、ということも思い出す。

姉は私と違い、巫女姫の娘というだけでなく、巫女としての力も強かったから、将来の巫女姫候補とされていた。だから、私なんかよりも、ずっと行動も生活も制限されていて、自由に外に出ることは出来ない立場だったはずだ。

でも、私のところへ突然訪ねてきたことからわかるように、そういう立場にもかかわらず、堅苦しいことが姉は嫌いらしい。お忍びで外に抜け出してしまうこともよくあつたようだ。

それに付き合わされるのは、いつだってアキトなのだと気がついたのも、神殿にあがってからのことだった。

姉の隣にはいつも彼がいた気がする。

アキトと姉は同じ年で、巫女姫の兄であつた男性が、アキトの父

親と親しかったこともあり、二人は幼い頃から面識があつたらしい。もちろん、互いの立場があるから、庶民のように常に一緒にいるというわけではなかったようだけれど、姉はあんな性格だし、アキトは自分の意見ははっきり言う人だ。意外に気があつたということなのだろう。

もしかしたら、それだけの関係ではないのでは、と幼いながらも思っていたのは事実だ。

実は、私も何度か姉のお忍びに付き合わされたことがあるのだ。

その時は、必ずアキトが一緒に、文句を言いながらも、彼は姉には随分甘かった気がする。

二人の様子を見る度に、私とアキトの距離は離れていったようにも思う。

幼い頃のように無邪気に彼の名前を呼ぶこともなくなり、気が付けば、私とアキトの間には、以前のような関係はなくなっていた。

最後にこの坂を一人で歩いたのは、いつだったろう。

神殿を抜け出してミズナに会いに行った時だったろうか？ それとも神殿を出た後だった？

不思議なことに、その辺りのことは曖昧で、思い出すことが出来ない。

会いたい。けれど、会えばミズナに迷惑がかかる。そのことがわかっていたから、殆どは家にたどり着く手前で引き返していた。

今も同じだ。

ミズナに会いたい。

けれど、行つてどうにかなるわけもない。

その願いを叶えるには、私はあまりにも過去の自分からかけ離れた存在になってしまったのだ。

ミズナは神殿の秘密を知っている。森の奥に隠された真実を守る存在でもある。

その彼女が私を見れば、何が起こったのかをすぐに理解してしまうだろう。

しばらく坂の向こうを眺めていた私は、昔と同じように、結局は登りきることはなかった。

6・思い出

祭は、3日ある。

一番盛り上がるのは3日目だが、稼ぎが多いのは2日目だ。

3日目ともなると、神殿で行われる儀式の方が中心になり、信仰深い人々は、皆神殿の方へ行ってしまうのだ。羽目を外すのも騒ぐのも、3日目の朝まで。

それを知っている行商人や旅の一座の2日目の気合いの入りは違う。

うまくいけば、しばらく無理をしなくてもいい程度の稼ぎを得ることができるのだ。

わかつているから、いい加減に宿へ戻った方がいいだろうと、私は一座が泊まる宿まで帰ってきた。

明日——もう今日になるわけだけれど——も早いのだ。少しでも寝ていた方がいい。

皆はすでに眠りにについているようだが、足音を忍ばせ部屋に戻ろうとしたとき、階段に人影があるのに気が付いた。

眠れない誰かが出てきているのだろうか？

そう思ったが、掛布を被った姿がやけに小さいことが気になる。

まさかと、思う。

一座の中で小柄なのはまだ子供であるリリだけだ。一座以外の者とは考えられない。この安い宿に泊まっているのは、他の旅芸人があるいは祭のためにやってきた行商人。あまり高い宿は選ばないような人間ばかり。その中に、小さな子供はリリ以外いなかったはずだ。

近づいてみると、想像した通りの顔が掛布から覗いているのがわかった。眠そうな目を必死に開けてこちらを見ているのは、間違いなくリリだったのだ。

普段ならもう夢の中のはずで、幾ら眠れなかったとしても、寝台

から出てくることなどないはずである。

眠れないのだろうか。

そう思つて声をかけようと思つたのだが、それより先にリリが立ち上がつて駈けよつてくくる。

「おかえりなさい」

「おかえりつて。こんな時間まで起きていたの？」

咎めるような口調になつてしまつたせいだろうか。

リリの頬が膨らむ。

「だつて。帰つてこないんじゃないかつて思つたから」

意味がわからなかった。

私はこの一座のナージャ弾きで、それほど上手くはないけれど、一応舞台にも出ている。帰る場所はここしかないはずだった。

「ここ、アーリアの故郷なんでしょう。もし大事な人に会つたら、私たちのところには帰つてこないんじゃないかつて」

「ああ、そうか」

溜息ともとれるような吐息が私の口から漏れる。

ようやく納得できた。

私がこの街の出身だということは隠していた。知っているのは、拾つてくれたダディルと座長である親父さんだけだ。他の皆には、なるべく過去のことには口にしないようにしていたし、懐かしいとか帰りたいとかいう気持ちを見せたこともなかった。

だが、私がこの街の近くで拾われたことに関しては、皆が知っている。リリなりに、何かを感じ取つていたのかもしれない。

「確かに故郷だけれど、ここにはもう、身内と呼べる人はいないよ。それに、もし留まるにしても、勝手にいなくなつたりしない」

「本当に？」

「本当だよ。約束する。この一座以外、私に帰る場所なんてないから」

その言葉によつて安堵したのか、リリがほつとした表情を浮かべた。安心したせいかな、眠そうにあくびまでしている。

やはり、しっかりしているようでも、子供なのだろう。

眠いせいもあるのかもしれないが、私がついた小さな嘘にも気が付かなかったようだ。これが座長やダディルあたりなら、いろいろと察してしまったかもしれない。

心が痛む。

純粹に心配してくれる相手を裏切るような行為だから。

けれど、行く場所がないのも本当のことだし、身内だと心の底から思えるのも一座の皆とミズナだけだ。

血が繋がってしようが、神の前に誓おうが、それが自分のとって大切な相手だとは限らない。

母も姉も。婚姻という名で繋がれた相手でさえも、結局『他人』でしかなかったのだ。

寝台に入るとすぐに寝息を立ててしまったりリのように、私はすぐには眠れなかった。

空いている寝台は1つしかなかったから、リリの隣に並んで横になったのはいいが、目を閉じてもちっとも眠くはならなかった。

もしかすると、思っているよりもこの街は私を追い詰めているのかもしれない。

誰か、知っている人に会うかもしれない不安。

過去を知っている人間に、私が私であることを暴かれる恐怖。

まだ心の奥底に眠っている未練が、私を落ち着かなくさせている。2年という月日は、長いと思っていたけれど、そうでもないかもしれない。

忘れてしまったこと、もう過去のことだと考えていたのに、こんなに簡単に全てを鮮明に思い出してしまう。

過去と割り切ってしまうには、まだ早かったのかもしれない。

思い返してみれば、神殿での記憶の大半は、巫女としての修行と礼儀作法をたたき込まれた勉強の時間だ。

普通の子供として育ったわけだから、日常的に必要な礼儀しか知らなかった。ミズナの屋敷に身分が高そうな人間がやってきても、挨拶程度の接触しかしたことはない。ただの子供だったから、相手もそれほど礼儀に対してはうるさく言わなかった気がする。

けれども、神殿で巫女として暮らす以上、礼儀作法は必須である。貴族だけでなく、王族と会うことが多い。

巫女姫や高位の巫女を訪ねてきた相手に、失礼な態度をとることなど許されない。

物心つく前から神殿に暮らしていた巫女たちは、小さい頃にきちんといろいろと習っているから自然に振る舞えるが、私は無理だ。知らないことが多すぎて、失敗も多かった。

確か、最初の頃は、私よりもずっと小さい子たちと一緒に礼儀作法を習ったはずだ。

怒られてばかりだったから、思い出すと悔しい気持ちになるけれど、しごかれたせいで、それなりに巫女らしい優雅さは身に付けられたのだと思う。

教える方も、巫女姫の娘らしく、が口癖だったから、合格点をもらえたときは、涙が出るほど嬉しかった。

でも、本当はその時に気付くべきだったのだ。

外で育った異例の子供が『巫女』として迎えられた理由。

巫女姫の娘であると、正式に認められたのは何故なのか。

しつこいほどに礼儀作法を教え込まれたのはどうしてなのか。

ひとつは、私の存在が漏れていたことである。それまで、存在は一部の人間に認識されていたが、どこにいるか謎だった巫女姫の娘姉が知ったくらいだから、他にも居場所に気付いたものはいただろう。そこから、神殿に取りいりたい者、あるいは悪意を持つ者に居場所がわかったらどうなるか。

このまま放っておくと、利用される可能性がある。

巫女は血筋が重要視される。少しでも巫女の血を引いていれば、父親が誰でも生まれた娘は巫女だ。

他にも、巫女が一族内にいれば、地位もあがるし、それなりに箔も付く。

男には巫女としての力は現れず、その子供も巫女として生まれてくることはないが、やはり巫女の血筋ということで、貴族などであればかなり優位に立てる。

そんな子供を外で野放しにしておくのは危険だ。

姫巫女や高位の巫女たちが考えても当然だ。

保護の意味も込めて、やはり神殿に引き取ろう———そういう結論になったとしても不思議ではない。

もつとも、これは、私の素性が知られても知らなくても、いつかは起こる問題だったのかもしれない。

普通の娘として育てていても、私が娘が生めば、その子は巫女だ。何も知らない者や、他国の人間と婚姻関係を結ぶというのは、望ましくない。

だから、娘が生まれれば、ミズナは、私に真実を話さなければならぬだろう。

私だけなら庇うことも出来るが、その子孫まではミズナだって守れない。

ならば、彼女は、娘を神殿に渡すように告げる。少し考えればわかることで、その辺りは半分仕方なかったと諦めた。

けれども、おそらく、これは表向きの理由だったのだと思う。

元々、私は神殿に仕えるために呼び寄せたものではなかった。

これまで顧みることさえなかった娘を引き取ったのは、巫女姫が有力な貴族と巫女の婚姻を考えていたかららしい。

母と王は、自らの権威を確かなものにするための駒が欲しかったのだ。

どうしても、身のうちに取り込みたい貴族。

今まで、一度も巫女の血を入れたことのない一族。いつのまにか

力をつけてきて、無視できなくなった新興勢力。

敵対されないうちに、巫女を差しだすのは簡単だった。そういう例が過去にも幾つかあったのも事実だ。だが、ただの巫女では嫌だと相手は言う。あろうことか、姉——次代の巫女姫候補を望んだらしい。

もちろん、それは無理な話だ。そこまでは妥協できない。

何度か話し合った結果、巫女姫はずっと隠していた娘を差しだした。どんな言葉を使ったのか、どういう風に説得したのか。相手は、それを受け入れたという。

条件として、私は慣例を無視し、夫の元で暮らす。一度例外として外に出ていた私なら容易いことだと思われたのかもしれない。

どう考えても、神殿に対する人質みたいな気がするけれど、相手にしても、もし私に何かあったら、失脚させられるという可能性もあっただろうから、お互い様だったのかもしれない。

けれど、当事者である私は、そう簡単に納得できなかった。

めずらしく母に呼び出され、何事かと思って訪れた部屋で告げられた言葉に、私は呆然としてしまった。

声を上げて抗議したのも、その時が最初で最後。

断りたかったけれど、それが許されるはずもなく、頭を下げ『母』として頼む巫女姫に結局は押し切られてしまった。

本当は、嫌だった。

何故なら、告げられた名前は、よく知ったもの。

自分のことを、異性としては好きになっではくれない人。

同じ名前の違う人間であれば、どれだけよかっただろう。

そんな願いが叶うはずもなく、彼——アキトは私の前に現れ、何のためらいもなく私の夫になることを了承した。

まるで、義務を果たすかのような淡々とした態度に怒鳴りつけたくなったけれど、それをしなかったのは、私にも意地があったせいだ。

そこに姉がいたせいだ。

姉は、まっすぐにアキトを見ていた。
アキトも。

私ではなく、姉だけを見ていたのだから。

神の前で行われる巫女の婚姻の儀式は、皆が思うほどに派手なものではない。

普段、祭の時などで着る服は煌びやかなものだが、婚姻の時には白い絹で作られた簡素なものを身の纏うだけだ。

宝石も花もない。

祝福のために訪れる人もいない。

絆を結ぶ人と二人で、神殿の奥宮に入り、巫女姫の祝福を受けるだけだ。

そこに喜びはなかった。

隣に立つ人は、まっすぐに前だけを見つめ、決して私の方を見ることはなかった。

いつそ潔いほどだ。

兄のように感じていたはずの人だった。

仄かに恋心さえ抱いていた。

幼い頃、この人と一緒になればどんなに嬉しいだろうと思ったこともあったのだ。

その彼が隣に立っているのに、胸が苦しくて、どうしようもなかった。

その夜、彼は私の元へ訪れなかった。

整えられた白い敷布の上で、ひどく惨めな気分のまま座りこみ、ありえない期待を胸に一人きりで見ていた窓の外が、赤く輝いていたことだけが今も忘れられない。

7・昔日（四）

街は、昨日よりも更に賑やかになっていた。

昼間から酔っぱらっている人もいたし、子供達も、どこか楽しそうだ。

私たちも、道行く人を引き止めるために、いつもよりも気合いが入った歌や踊りを披露している。

かつて見る側だった時は、皆楽しんで歌い踊っているように思えていた。

派手な衣装を着て、美しく化粧をして、微笑んでいる姿は、どこか別世界の住人のように見えたものだ。

今では、そればかりではないことを知っている。

彼らは、特別でもなんでもなく、ただ日々を生きるために芸を見せているだけだ。私もそう。ナージャを引くのは、遊びでもなんでもない。弾くことは嫌いではないけれど、命をかけるほど好きかと言われると違うと答える——その程度。

けれど、今日ばかりは、周りの陽気さに釣られたのか、演奏も楽しかった。

不思議な気分だ。かつての自分と同じような笑顔で芸を見ている人たちに対して、懐かしいという思いさえ湧いてきている。

戻ってきたばかりの時には、感じたりはしなかったのに。

やはり、ここが故郷のせいなのか、

複雑な思いを抱えながら、私はかつてのことを思い出していた。

結婚したとは言っても、私は世間一般で言う妻とは違っていたよな気がする。

神殿から出てアキトの屋敷へと移った頃は、少しでも屋敷の者と馴染もうとしたけれど、そのうちに気が付いてしまった。

屋敷の者が、腫れ物でも扱うように私に接してくることを。

巫女姫の娘という立場がそうさせるのかとも思っていたけれど、違うことはすぐにわかった。

アキトと私が、神殿による政略結婚なのは周知のことだ。

それに、アキトの思い人は姉だということを、皆知っている。

彼女は、この屋敷へもよく遊びに来ていたのだ。

姉と二人、何度も会っているところも、仲むつまじい様子も、彼らは全て見ている。

だから、姉ではなく私が嫁がされたということに、不満を持っていてもおかしくはない。

彼らも、次期巫女姫候補である姉が、すんなりとアキトと結婚出来るとは思っていなかっただろう。ここ最近力をつけてきたとはいえ、それほど古い家柄ではない一族だ。普通の巫女なら可能性としてはあつたのだろうが、将来神殿の頂点に立つかもしれない姉を、そんなに簡単に手にすることはできない。

だが、疑問もある。

アキトの父親には、結婚後、何度か会ったことがあるが、野心的な人物に思えた。巫女姫の兄と親しくなったのも、彼から近づいてのことだったというし、ことある事に姉とアキトを会わせる場を作っていたようだ。

姉とアキトが恋仲になることを望んでいたのではないか——周りの話を繋ぎ合わせて出た結果がそれだ。巫女姫と今の王はイトコ同士でもあるせい、王は巫女姫に助言を求めることも多い。反対に、巫女姫自身も困ったことがあると王に相談しているようだった。隠していることではないから、国の上層部で、そのことを知らないものはいない。うまく立ち回れば、王や巫女姫と血縁関係を結べる可能性も出てくる。そう思っていたとしても不思議ではない。

王たちにしても、政治的にも発言力を持つ彼らをないがしろには扱えないが、これ以上権力を持たれるのも困る。

だから、身分は低い父親を持つが、確かに巫女姫の血を引く私を

代わりにあてがった。

推測でしかないけれど、恐らくそうなのではないかと思う。

次期巫女姫ではないが、正式に神殿が認めた巫女であり王族に連なるものであるとなれば、アキトの父親も納得したということか。

事実、その後、アキトの父親は、王の側近となり、アキト自身も神殿付きの高位武官となった。これは異例のことだ。大抵の高位の武官は、巫女たちと血縁関係があるか、あるいはその親族に限られていたのだから。やはり、元が付くとはいえ巫女の夫という立場を得たことが大きいかもしれない。

それに、実は巫女の中には特定の夫を持たず、子供を得るものも多いのだ。

地位の高い武官になれば、巫女の『父親』になる可能性も出てくる。すでに特定の相手がいるものを選ぶのはよくないとされているが、禁止というわけではない。

嫌な推測だけれど。

アキトが神殿付きの高位武官になったのは、彼の父親が、まだ諦めていなかったからではないかとも思うのだ。

巫女姫候補の子供の『父親』にアキトがなること——一番叶えなかったことが現実になるならばと、アキトがその地位につくことを強く押したのかもしれない。

アキトが、妻がありながら、そういうことをする人間ではないと思っっている。

姉だつて、そうだ。自分が勝手な行動をして、人が傷つくことを怖れる人なのである。

そうは思っただけでも、だんだんアキトは神殿に詰めることが多くなり、屋敷には滅多に帰ってこなくなった。

私とは、好き合つて結婚したわけではないから、顔を合わせづらいのか、それとも、やはり姉が恋しいのか。

アキトが帰ってこないせいで、自然と屋敷で1人過ごすことが多くなった私は、そんなことばかり考えるようになってしまっていた。

神殿での生活の方がましだったかもしれない。私を馬鹿にする者もいたが、そればかりではなかった。

自由もあつたから、抜け出すことも可能だったのである。だが、結婚してからは、外に出ることも許されなくなった。

毎日同じ時間に起き、独りで時間を過ごし、ご飯を食べて、同じ時間に眠る。

その繰り返しだ。

たまに帰ってくるアキトとも、殆ど会話はなく、食事と一緒にではなかった。

例外があるとすれば、姉が訪ねてくる時だけだ。

姉は、よく私に会うという理由で、神殿を抜け出して遊びに来ていた。

優しい姉は、アキトと私が幸せであればいいと口にする。

それが本心からだったのか、自分を押し殺して《不憫な妹》を思いやる気持ちからだったのか、今となってはわからない。

ただ、私にとっては、姉の言葉は苦痛以外の何物でもなかった。

その頃からだろうか。

身の回りにおかしなことが起こり始めたのは。

最初は、頭痛だった。

頭の芯がずんと重くなるような気がして、そうすると、立っているのも辛くなる。

熱があるわけでも、頭以外のどこかが悪くなるわけでもない。

ただ、ずきずきと痛い。

あまりにもひどいとき、屋敷付きの医者にも診察してもらったが、特に病をわずらっているわけではないと言われた。

慣れない生活のせいかもしれないから、そのうち治まるだろうと言われ、気持ちが落ち着くような薬を渡されただけだった。

それでも傷みは治まらず、ますますひどくなるばかりで、気が付

いた。

頭が痛くなるとき、いつも、誰かの視線を感じることに。
人の目ではない。

何か、もっと不快で気持ち悪いもの。

それが、ずっと付いてまわってくるのだ。

寝室だけではなく、食事の時や湯浴みの最中、部屋で過ごすときも、突然に起こる。

そこから見る者は、誰もいないはずなのに。

気味が悪かった。

その日も、頭がひどく痛かったように思う。

数日前に姉が遊びに来ると知らされ、その準備に追われていた。

名ばかりの妻だとはいえ、何もしないわけにはいかない。相手は
神殿の巫女なのだ。

いくら気を遣わないでと言われても、実際はそれほど簡単には事は運ばない。

姉はそういうあたりは無頓着だから、周りのものの気の使いようは相当なものだ。もっとも、姉はいろんな人に好かれていたし、お願いされれば結局は折れてしまうものも多かった。

私も、最初こそは姉の行動に迷惑していたが、そのうち折れる側に回っていたのだから、何か言える立場でもなかったのだけれど。

それに、姉が来る時は、必ずアキトが屋敷にいる。もしかすると、アキトがいるから姉が来るのかもしれないが、主人がいるのに、私がじっと部屋に籠もっているわけにもいかなかった。

「どうした？ 気分が悪いのか」

めずらしくアキトにそう声をかけられ、私は途惑った。こちらから話しかけることはあっても、その逆はなかったからだ。

「調子が悪いのなら、今日の予定は中止するか？」

それほどまでに、自分の顔色は悪いのか。

慌てて否定したが、アキトは納得しなかったようだ。

このままでは、姉の訪問を中止しそうだったから、私は大丈夫と繰り返した。

その頃の私たちは会話も少なく、関係も冷え切っていたが、アキトのことが嫌いになったわけではない。

むしろ、私がいることで、彼がいつも難しい顔をしているのが申し訳なかった。

そんな彼が、かつてミズナの家に来たときのように笑顔を浮かべるのは、姉が来たときだけだ。

私のせいで止めてなんてして欲しくない。

滅多に会えず、ゆつくりと話も出来ないから、アキトが、どれだけ楽しみにしているか知っているのに。

「それよりも、今日は天気がいいから、外で食事はどうかと思うのだけれど」

そう提案したのは、話を逸らしたかったからだけではない。

そういう機会でもないと、自身も外に出ることを許されないからだ。気分が悪いという理由だけで、楽しみにしていたことを中止したくはなかった。

姉が一緒ならば。

アキトがいれば。

そういいわけすることで、ようやく私は屋敷から解放される。

「そうだな。たまにはいいかもしれない」

アキトはそう言っ、珍しく口元に綻ばせ、私の方を見た。

久しぶりの外だったけれど、やはりその日の私は気分がすぐれなかった。

それに加えて、アキトと姉の間を流れる和やかな空気に、すぐにいたたまれない気持ちになる。

私が会話から閉め出されないように、姉は気をつかって私に話し

かけてくれるけれど、そのことで、ますます互いの気まづさが増していった。

結局、その場の雰囲気になえらなくなってしまったのは私の方だった。

「あつちで咲いている花、綺麗だよ。ちょっと摘んできていい？」
自然にそう言えたのは、川辺に咲く見慣れない花に心牽かれたというのもある。

「あまり遠くにいつてはだめよ」

その場のぎごちない雰囲気、いつもとは違い、姉はあっさりとそれを許した。

アキトの方はどうせ何も言わないとわかっていたから、最初から許可など取らない。

「わかっています」

姉の顔だけを見て私が頷いたのは、アキトが渋い顔をしているとわかっていたからだ。

そのまま、少し歩調を早めて、川辺へと移動した。

二人から見えない場所までくると、私は丈の高い草の間にしゃがみ込む。

姉たちの方は心配ない。

来る途中、何度か振り返ったけれど、二人はもう私のことなど見ていなかったからだ。

そのことに安堵すると同時に、胸が痛くなったけれど、その時の私はそれに気がつかないふりをした。

代わりに、先ほど見つけた花を眺める。

その見慣れない花は、淡い黄色をしていた。

幾重にも重なった花びらが、まるで球のようにまとまっている。

私は、それほど花には詳しくない。だが、名前はわからなくても、この辺りに咲くものは大体覚えている。

誰かが植えたのか、どこからか種が飛んできたのか。
初めて見る花なのは間違いなかった。

花は甘い臭いを発していた。この辺りに咲く花は、強い匂いはしない。

そういう点も、この花は変わっていた。

もう少し、花を眺めて、それからこれを摘んで姉たちのところへ戻ろう。

私はそう思ったのだけれど、自分が考えていたよりも、体は疲れていたのかもしれない。

いつのまにか、私は草の影に埋もれるようにして、眠りに落ちていった。

そして、私は不思議な夢を見た。

知らない場所に立っていた。

白い、部屋だった。

床も、壁も、天井も、すべて白い。

そこには何もなく、音もしない。

確かに立っているはずの自分の感覚さえ、どこか曖昧だった。

『可哀想な、愚かな娘』

声が聞こえてきたのは、辺りを見回していた時。

誰だろうと、辺りを再度確かめたが、誰もいないし、気配さえしなかった。

嘲るような、蔑むような、優しさの欠片もない声。

どこかで、聞いたことがあるような気がしたけれど、わからない。

『我がずっと待っていた、誰よりも醜く浅ましい娘』

誰かが笑っている。

人を馬鹿にしたような、嫌な笑い。

どうしてかな、これも知っている。遠い昔、確かに聞いたはずだ。でも。

……頭が痛い。

ずきずきと、まともに思考出来なくなる。

何も考えられなくなる。

『我は待っている。……に、おいで。愚かで可愛い私の……』
言っている言葉は、もう聞き取れなかった。

そのまま、私の意識は闇へと沈んでいき、何もわからなくなったのだ。

気がつくと、太陽が少し傾いていた。

もう頭が痛くはなかったが、体が熱く、起き上がろうとすると、ふらついてしまう。

嫌な夢を見たせいかもしれない。

妙な夢だったからという以上に、気持ち悪い感覚が残っている。すぐに動く気にはなれなくて、私はしばらくぼんやりと空を見ていた。

だから、あの時、私は自分と呼ぶ声にしばらく気が付かなかった。
「カナ！　いないのか？」

せっぱ詰まった声は、アキトのものだった。

何度も私の名前を呼んでいたのだろう。声が少し掠れていたはずだ。

「アキト？」

草の影から顔を出すと、少し先にアキトがいた。めずらしく息を荒くしているのが、不思議だった。

「姿が見えないから、捜していた」

「ごめんなさい。気持ちよかったから寝てしまっていて」

「ずっとここにいたのか？　おかしいな。さっき捜した時には気が付かなかったが」

アキトは不思議そうに何度か首を傾げていたが、その時の私は特におかしいとは思わなかった。

捜したといっても、この辺りの草は背も高い。

私も隠れるようにして寝入っていたから、単純に気が付かなかった

たのだろうと考えていた。

「姉様は？」

アキト一人だと気付いて、私はアキトにそう尋ねた。

「さっきまで一緒にいたが、あまり遅くなってもいけないから、帰した」

「ご、ごめんなさい」

咄嗟に謝ってしまったのは、後ろめたい気持ちになったからだ。

姉が来た日は、必ずアキトが送っていく。

それは暗黙の了解のようなもので、姉についてくる者も、屋敷のものも当然のように二人を送り出す。

そして、遅くまで帰ってこない。

二人が何をしているのか、どこへ行っているのか、聞きたくても聞けないのは、二人の仲を知っているから。

「ごめんなさい。これからは気をつけるから」

「……何故謝るんだ」

どこか呆れたような声音に、顔が上げられない。

「だって……。ごめんなさい」

溜息が聞こえた。

やはり呆れてしまったのだろう。

「昔はもつと……」

アキトが何かを言いかけた。だが、その先を続けることはない。

「いや、いい。……帰ろう。いつまでもここにいたら、風邪を引いてしまう」

昔のように私の手を取ると、彼は顔をしかめた。

「冷たいな」

そう呟いた声は優しくかったけれど、私は何も言わず、彼の手から自分の手を外してしまった。

その時、アキトがどんな顔をしていたのかは知らない。

いや、見ていないといった方が正しいのかもしれない。

一瞬、肩を振るわせた後、彼は屋敷に帰るまで、私の方を見るこ

とはなかったのだから。

8・雨乞い

窓から差し込んでくる眩しい光で、目が覚めた。

考え事をしているうちにいつのまにか眠ってしまったらしい。

それでも、眠りは十分ではなく、体は重いし、目は腫れぼったい。今日は祭の二日目で忙しいというのに、体調不良でナージャが弾けませんでは、あまりにも情けない。

気分を切り替えるように伸びをして、私は寝台から起き上がる。辺りを見回すと、部屋に残っているのは自分だけになっていた。思っていた以上に寝過ごしていたらしい。

素早く着替えて階下へ降りると、私の気配に気が付いたのか、がらんとした食堂に一人座っていたダディルが顔を上げた。

「遅いぞ、アーリア」

「少し夜更かししすぎたみたいね」

軽く肩を竦めながらダディルに近づくと、彼の前にパンと煮込んだ野菜が盛られた皿があるのに気が付いた。

「これは？」

「一応、朝ご飯だつてさ。とはいっても、みんなが食い散らかした後だから、そのくらいしか残っていないんだけどな」

「これだけあれば十分」

朝からそんなにたくさんは食べられない。パンを脇に追いやり、野菜を引き寄せると、ダディルの片方の眉が上がった。

「パンは食べないのか？ それだけだともたないぞ」

そういうダディルも、たくさん食べるほうじゃない。

むしろ、朝はパン一つくらいしか口にしていないはずだ。絶対に、人のことは言えない。

「そういうダディルはどんなのさ」

私が睨み付けると、ダディルは肩を竦める。

「まあ、適当に」

曖昧な返事を返した後、ダディルはそのまま視線を手元に落とした。

そこにあるのは、色鮮やかな石が連なった首飾りだ。他にも、金や銀の腕輪や耳飾りなどが積み上げられている。

どうやら、ダディルは、舞台上使う装飾品を直していたようだ。

ごつごつしている大きな指が、器用に動く様を見るのは、結構楽しいから、私はしばらく彼の様子を眺めていたんだけど。

熱心に見過ぎていたせいだろうか。

溜息とともに、指の動きが止まった。

「あんまり見られると、緊張するんだけどな」

「あ、ごめん」

慌てて謝ると、ダディルは苦笑した。それは、見られていることが困ったというよりも、何か他の事を考えてのことのようにも思えた。

「アーリアは、首飾りとか、嫌いかな？」

そして、唐突に聞かれたのはそんなこと。

「どうして？」

「普段着けているのを見たことがないから」

確かに、この一座に入ってから私は装飾品の類を身につけたことはなかった。

嫌いなわけじゃないし、幾つか舞台用に持っている。

着飾るのだって、人並みに興味があつたし、巫女になってからは儀式の度に、重い装飾品で身を飾った。

結婚した後は、それなりのものを所有していたわけだし。

ああ、でも。

自分で欲しいと思って買ったものなど、ひとつもなかった気がする。

いつだって、人から与えられてばかりだった。

「言われてみればそうだけど、嫌いじゃないよ」

「そうか？」

「なに？　いつもはそんなことに興味がなさそうなのに、急にどうしたのよ」

そちらの方が気になって、私は追求してみる。ダディルは困ったように私と装飾品の間で視線を彷徨わせていたけれど、諦めたように息を吐いた。

「あー、カテリアんところの曲芸師を知っているか？」

「カテリア？」

確か、私達と同じような旅芸人の一座の座長の名前だ。

歌と踊りが主な私たちとは違って、変わった芸を見せる人たちがたくさんいることで、それなりに有名だったはず。

カテリア自身も飾らない性格の陽気な中年の女性で、うちの座長——オヤジさんとも仲がいい。そのせいか、他の街で出会った時は、一緒に飲んだりしたこともある。

その中には、確かに曲芸師もいた。

ルディという名前だったのもちゃんと覚えている。人懐っこい笑顔が印象的で、器用にいろんなものを回す芸を得意としていた。

「ルディなら、わかるよ。彼がどうかしたの？」

「そいつが、どうもお前に贈り物をしたらしいぞ。それとなく、うちの者にお前の好みを聞いていた」

「あー。なるほどね」

こういうことは、実は初めてではなかった。

この容姿のせいだろうか。それとも、職業のせいだろうか。

美しいわけでも、抜きんでいい身体を持っているわけではないのに、声を掛けてくる男は多い。

口説いてきた男に、私のどこがいいのかを聞いたら、神秘的な雰囲気と言われたのも、一度や二度ではない。

もちろんルディが外側だけ見る男だとは思っていないが、真面目な気持ちならば余計に申し訳ない気がする。

「そんなに気軽にもらえないよ」

「だと思った。みんなお前が特定の誰かを作らないのを知っている

からな」

過去に結婚していたということがあるのかもしれない。正式に別れたわけでもないから、どうしてもきちんとしたお付き合いというものに対して、躊躇する気持ちもある。

いい加減、忘れなければいけないと思うのに。

何かあると、どうしても思い出してしまう。

無意識に動かした右手が、胸元にいく。服に隠すようにして身につけている唯一の装飾品が、指先に当たった。

アキト。

忘れられない——いや、忘れたくない人の名前を心の中で呟く。この指輪を捨てられないことこそが、私の未練そのものなのかもしれない。

3年前、婚姻の証にと渡されたのは、美しい銀細工の指輪だった。私の指には大きすぎるそれは、ほんの少し前までアキトが身につけていたもの。

この国では、男性も魔除けとして指輪を身につける習慣があるから、彼が持っていたとしても不思議はない。

彼は、無造作な仕種で指から抜き取ると、それを私の手に押しつけた。

この国では結婚した男女は、互いが身につけている装飾品を交換するという風習がある。

彼もその一般的な風習に倣ったのだろうと思ったから、私も何か渡そうと身を飾る装飾品を確かめようとした。だが、「いらない」と素っ気なく断られてしまう。

そのまま何も言わず立ち去ってしまったアキトに呆然としながら、私は手の平で転がる指輪をどうしてもいいかわからず、途方にくれてしまった。

よく見れば、その指輪は傷も曇りもなかった。

磨き立てのような艶やかさに、それが新しいものなのだとわかる。おそらく、この指輪は形式だけのものなのだ。

男性は、身につけているものを人と見せあたりしないが、女性とは違う。婚姻したにもかかわらず、何も贈られていなければ、余計な詮索をされることも多い。

例えば政略結婚だとしても、世間体というものを重要視するのだ。アキトもその一人だったということなのだろう。真面目な性格だからなのか、それとも、それなりの地位にあることが理由なのか。そういう形式にだけはこだわるのが、妙におかしかった。

それでも、私はそれに鎖を通し、肌身離さず持っていた。

どれほど意味のない形だけのものだったとしても、アキトから初めてもらった装飾品なのだ。

彼が私のことを好きではなかったとしても、嬉しかったのは間違いない。

それに、まだ、努力すればアキトに近づけるかもしれないと思う気持ちもあった。

時間はたくさんあるし、この表面上は穏やかな国が、変わる事などないと信じていたからだ。

異変が起こったのは、結婚して1年立つ頃だっただろうか。

相変わらず私とアキトの間はうまくいっていなかったけれど、長くすくううちに、屋敷のものとはそれなりに話せるようになっていたと思う。

一線引かれていることは感じていたが、最初の頃のような刺々しい態度を取られることは少なくなっていた。

だからかもしれない。

いつも世話をしてくれている女性は、身支度を手伝う合間に、街で起こっている何気ない事を教えてくれる。

最近、不作が続いている話や、雨が降らないこと。なんとなく街

の雰囲気暗いこと。

どれも、ごく普通の世間話だった。

物盗りも増えて物騒だから、奥様も気をつけてくださいねと言われたが、ほとんど外に出ることがない私には無縁の忠告だろう。

「そうそう。それから、もうすぐ巫女姫様が雨乞いの儀式をするのだそうです。だから、旦那様たちはお忙しいんですね」

雨乞いの儀式という言葉に私は驚いた。

この国は緑豊かで、水も豊富だ。

私が生まれてから一度も、雨乞いの儀式などしたことはない。神殿にいたのだから、過去にもそういうことがあったという事実は知っていたが、あの儀式は滅多なことでは行われないものだった。

元々、雨乞いと冠されているが、実際に天に雨を請うわけではない。

神殿が祭るというこの地に棲まう古の神に雨を願うのだ。

遠い昔、巫女姫と王の始祖が、祭り敬うことを誓った神。

大地と一体化した神は、この国に水と豊かな土地を約束したという。

だが、それは表の伝承だ。

神殿に伝わるのは、神は本来荒ぶるものでもあったということ。

巫女たちによって封じられる前は、この地に厄災をもたらす存在だったと言われている。

何故、元は荒れ地だった場所に、始祖たちがやってきて神を封じたのか。

そもそも、何故封じるだけに留まったのか。

そのあたりは、たぶんもつと上の地位の人しか知らないことだろう。私みたいな巫女としては地位も低い人間には、あまり詳しいことはわからない。

わかっているのは、始祖たちが神に戦いを挑んだこと。

多くの犠牲によって、神を倒し契約したこと。

それ以来、神は国を守り、豊かにしてきた。

けれども、封印が完全でなかったのか、何か理由があるのか、神本来の性質が時折現れることが何度かある。そういう時は、必ず水が涸れていくらしい。

そうなってしまうと、神を鎮めるしかない。その時強い力を持つ巫女が執り行うというのが暗黙の了解。大抵は、巫女姫自らが儀式を行う。

命を賭けた儀式でもある。成功するまで続けられるとも聞いた。

巫女や神殿に関わるものだけが知っている真実。

だからこそ、後がない状況なのだと、わかってしまう。

巫女の命を犠牲にしなくてはならない儀式など、普通の状況では行なわれるはずがないからだ。

アキトや姉に尋ねれば詳しいこともわかるかもしれないけれど、私が聞いたところで答えてくれるとも思えなかった。

ならば、どうすればいいか。

神殿時代のツテをたどるという選択肢も考えたが、それほど親しい人間がいたわけではない。

もう外に出てしまった私に対して、詳しい話はしてくれないだろう。

残るは、ミズナだ。

彼女ならば、神殿で起こる重要なことは知っているはずだ。ましてや雨乞いの儀式が本当に行われるというならばなおさらだった。

何故なら、彼女が守っている森こそが、神が住まうという場所だったから。

ミズナのところへ顔を出したいと告げた時、アキトは何も言わなかった。

母親代わりであつたから、単純に里帰りだと思ったのかもしれない。仰々しいことは嫌だから護衛も1人でいいと言ったときにはさすがに渋い顔をしたが、これも強引に押し切った。

私の顔は屋敷の者以外は知らないはずだし、姉ならまだしも、私を襲った所で何の特にもなりはしない。盗賊の類も、街中では殆ど出ることはなかったのだ。

それに、アキトとミズナの屋敷は近い。

心配しなくても、安全に行ける距離だ。神殿をこっそり抜け出して、少々治安の悪い場所へも平気で行っていたところに比べれば、たいたことではない。

アキトに相談した数日後、私は無口な護衛を1人だけ伴ってミズナの元へと訪れた。

扉の向こうで、最後に会った時と変わらないミズナが迎えてくれる。

「少しやつれているような気はしたが、こちらに向かって笑いかける姿が懐かしい。」

「どうしたんだい、突然。ここへ来るって知らせが来たときは驚いたよ。」

「いろいろ話したいことがあって。」

私が言うのと、一緒に付いてきていた男は心得たように、「外で待っています」と言い残し、屋敷を出て行った。

「とりあえず、座りな。」

ミズナに言われるままに椅子に腰かけると、彼女は途方に暮れたような困ったような顔をした。

「雨乞いの儀式をするの？ 噂になっっているようなんだけど。」

ミズナには、遠回しな言い方は通用しない。だから私はその時疑問に思っていたことを直接聞いてみた。

「残念なことだね、そうなんだよ。もう噂になっっているのかい？」

「私付きの侍女が言っていたくらいだから、結構広まっっていると思う。」

「そうか。」

ミズナが深刻そうな顔をしたものだから、私は不安になった気がする。ミズナはどちらかといえば楽天的なところがあつた。少々の

ことならば、「なんとかなる」といつて笑いとばすような人だった。子供だった私に心配かけまいとしてのことなのかもしれないけれど、それを聞くと安心できたのだ。

その彼女が見たこともない暗い顔をしている。

「私はほとんど屋敷から出ないから、実際の状況はわからないけれど、そんなに水は不足しているの？ 確かに最近雨が少ないとは思うのだけれど」

「雨は降っている。ただ、少しずつ、水が涸れ始めているんだよ。

街の外は、特にそうだ。だから、巫女は儀式をすることにしたんだ」

「儀式は誰が？」

「マヒロ様が行うことになるだろう。ただ」

「ただ？」

「いや、なんでもない」

それ以上、何を聞いても、答えてはくれなかった。

お前は聞かない方がいいのだ、と繰り返すばかりで。

何か不安になる要素があるのだろうか。確かに、雨乞いの儀式には危険が伴う。それで命を落とすこともある。

だが、姉は優秀な巫女だ。今いる巫女の中では、巫女姫の次に力が強い。

だからこそ、巫女姫候補だ。平穏な時であれば、決して失えな
い存在。

そんな彼女を使わなければならないほど、状況は悪いのか。

あるいは失敗が許されないのかもしれない。もしこのまま雨が降らず、農作物にもっと被害が出れば、神殿の有り様も問われかねないのだ。

屋敷を出て、少し歩いたところで振り返った。

屋敷の裏に広がる深い森。

その中に神はいるという。

けれど、その神が本当に存在するかどうかはわからない。中に入るものは限られているし、その声を聞くことが出来るほどの強い力を持つ巫女は少ない。

私はもちろん聞くことができない。巫女としての資質がまったくないせいだ。

それなのに、ふと誰かに呼ばれたような気がした。
嫌な感じだった。

同時に、これがあの時と似ていることにも気づく。

頭痛が起こったときの、見られているような感覚だ。

何故、神の住む森からそれを感じるのだろうか。

その時の私は、それが何を意味しているのか、わからなかった。

9・森に棲むモノ

「アーリア？ どうした、気分が悪いのか？」

かけられた声に、私は顔を上げた。

目の前で、ダディルが心配そうに私を見ている。

「眉間に皺を寄せたまま黙り込んで、皿の野菜を潰しているし、何か嫌いなものでも入ってたか？」

確かに皿の中の野菜が潰れていた。

いつの間にやったんだか。

自分では気が付かないうちに、随分考え込んでいたらしい。

「いろいろ思うことがあって、落ち着かないのかもしれない」

ここは思い出が多すぎる。楽しいことも、悲しいことも。

「アーリア」

ダディルの手が伸びてきて、私の頬に触れる。

大きくて、硬くて、ごつごつしていて、ところどころ傷跡がある。

あの時も、この手に救われたのだ、と思う。

ひとりぼっちで雨の中、立ち尽くしていた私を見つけてくれた人、ダディルに会わなければ、きっと私はそのまま死んでいた。ひよつとすると、死ぬよりも嫌な目にあったかもしれない。

それから、親父さんや、一座のみんな。リリ。

彼女らが私に居場所をくれなければ、今ここに私はいない。

「無理はするな」

大丈夫。

言葉には出さず、唇だけ動かして答えると、私はダディルの手に、自分の手を重ねた。

彼は私のされるがままになっている。逃げたりなんかしない。

それだけで安心できる。

いつだって、そうだ。

彼は、初めて会ったときから、忌まわしい文様を恐れることなく

私に触れた。

雨で視界が悪かったとはいえ、私の姿はちゃんと見えたはずなのだ。それなのに、躊躇ったり、変な目で見たりもしなかった。

まだ自分がどうなってしまったかも知らなかったけれど、もし、立場が逆だったら、声をかけるのを躊躇してしまうだろうと思う。

白い肌に刻まれた文様は異様だ。色の抜け落ちた髪だって、そう。私自身でさえ、いまだに慣れないのだ。

初対面の人間が驚いたからといって不思議はない。はっきりと拒絶する者だっている。

ダデイルが何故恐れたりしなかったのかわからないし、本当のところ、どう思っているかは知らない。

けれども、あの時、私を見つけてくれたのがダデイルだったことに感謝している。

差し伸べてくれた手の温かさは、例え何があっても忘れはしないだろう。

ダデイルだけじゃない。

一座の皆も、最初は少しだけ戸惑ったようだけれど、行く当てがないと知ると、何も聞かずに受け入れてくれた。

世間知らずだった私に根気よく付き合ってくれたし、馬鹿なことを言ったりしたりしても、見捨てはしなかった。

そうだ。

今、ここにいる彼らが、私の家族だ。

心配ばかりかけているけれど、彼らも私を大事だと言ってくれている。

いつまでも、昔のことで悩んでいても、どうにもならないのではないか。過去を忘れたいと言いながら、気にしているのは私自身だ。ならば、私は、自分の力で、過去への思いを断ち切らなければならない。

それに、気になることもあった。

神殿で巫女姫の側にいるはずの、アキトがいなかったこと。役職

を退くほどの年齢ではないし、2年前は確かに重要な祭の時、彼はあそこにいた。

所属する場所が変わったのかもしれないけれど、嫌な感じがする。確かめてみるべきなのかもしれない。

あの後——私がこの国を去った後、どうなったのか。

私が消えてしまったことで、何か責任を取るようになったのかも知らない。

考えてみれば、国を出てから、自分のことだけに一生懸命で、残されたアキトたちのその後など、想像したこともなかった。

私は巫女姫の娘として嫁ぎ、彼は私と一生を共にするはずだったのに、出来なかった。おまけに、私とアキトとは、2年前のあの日、禁を犯している。

神殿からすれば、重大な裏切り行為と取られかねない。

彼が私のせいで失脚したのだとすれば、申し訳ない気がするし、それを知らなければ、いつまでたっても、過去に囚われたままだ。何も聞かず故郷を後にするという選択肢もないわけではないが、きつと悔やみ続けることになるだろう。

同じ後悔なら、事実を知ってからの方がいい。

「これを食べたなら、ちよつと出掛けてくる」

ダデルの手をそつと頬から離すと、私は目の前の潰れてしまった野菜を見た。

「お昼過ぎまでには帰ってくるつもりだから」

「そうか」

彼はそれ以上何も言わなかった。

ただ、気をつけて行ってこい、とだけ口にした。

宿の外は、日差しがきつく、私は思わず目を細める。

そういえば、この時期、この国は一年を通して一番暑い。空気が乾いているから不快ではないが、色の抜けた目と肌には少々きつい。

ベールを被り直して、日差しを遮ると少しはましになった。

どこか浮き足立っている人々を眺めながら、さてどうするか、と考えた。

アキトのことが気になっているが、それを調べるにはどうしたらいいのか思いつかない。

かつての知り合いを訪ねるという選択肢はもちろん無しだ。だったら、どうするか。

この国にいて、この国の事情を誰よりも知っている存在。それに聞くしかない。

私をこんな目に合わせた元凶。

すべてを捨てることになった原因が棲まう場所。そこへ行くのが一番早い。

決心してしまうと、迷いは消えた。

私の足は、躊躇うことなく、街はずれの森へと向かう。

神がいるという、神聖な場所——そこにいるはずの存在に会いに行く。

もちろん、今歩いているのは、夜中に通った、ミズナの屋敷へと続く道ではない。

あの屋敷は、森と街を遮るように建っており、むやみに人が入らないように監視する場所でもあった。

通常は、屋敷の裏手にある入り口からしか森には入れないことになっている。

そこ以外から森へ侵入すると迷うように結界が張られているのだ。正しい道を正しい手順で進まなければ、奥に隠された神の座所にはたどり着けないと、神殿でも教えられた。

だが、実は森の中への道は一つではない。

長く忘れ去られてしまっていたが、古い時代に使われていた道がある。

細く頼りないものではあるが、道を外れないように気を付けさえすれば、座所の近くへ出ることも可能なのだ。

2年前、私は、ミズナや監視の人達に見つからないように、この道を使った。

運命が変わることさえ知らず、アキトと二人で、姉を救うために神の座所を目指したのだ。

10・昔日(五)

「かわらないなあ」

森のはずれ、屋敷からはちょうど反対側にある場所で、私は木々を見上げながら呟いていた。

ここは道らしい道もついていないから、記憶にある消えかけた石の目印だけがたよりだ。

古い時代には使われていたとはいえ、すでに森の周辺は藪に覆われている。

目印を探すのも一苦労だ。

2年前も同じだっただろうか？

私の前を藪をかき分けながら進むアキトの姿を思い出す。あの時は彼が棘や伸び放題の木々で私が傷つかないように守ってくれたのだ。

懐かしいけれども、苦い思い出は、今でも消えずに心の中に残っている。

*

*

*

アキトの様子がおかしいと思ったのは、雨乞いの儀式が行われることが正式に決定した頃からだった気がする。

普段から感情を表に出さない人だったけれど、眉間に皺を寄せ、誰に話し掛けられても難しい顔をするようになった。

彼らしくないことだ。

姉の前ならばともかく、使用人や私の前では、普段は感情を読み取らせるようなことはしない。

何かあったのだ。

雨乞いに、ではない。

雨乞いをするという巫女——姉に。

情報は少なかったけれど、確かな証拠も掴んでいた。

「今、雨乞いをするのは危険ではないのか」

そうアキトが言っていたと口を滑らせたのは、いつも彼について神殿に行く従者の一人だ。

姉の様子がおかしいということも、聞いていた。

こちらは、比較的良好な関係にあった巫女の一人から。

いつも笑顔を絶やさない人が、笑わない。話し掛けられても、気が付かないこともある。

巫女姫と口争いをする回数が増えたという話もあった。

何か問題が起こっているのは確かで、でも、誰も理由がわからない。ただ漠然と雨乞いに関係があるのではと思っている。

それは、巫女たちの間に不安を呼び、神殿内の雰囲気はぴりぴりしているのだという。

私には、巫女としての力は皆無だ。それでも、何かがおかしいと思うのだ。同じ場所で暮らす巫女たちは、もっと敏感に感じているのだろう。

そのくらい妙な空気が、この国に漂ってきている。

アキトに会おう。

そう決心したのは、彼ならば、他の誰かに尋ねるよりも、詳しい話を知っているはずだと思ったからだ。

自分自身が、この国の大多数の人と同じように不安だったこともある。

だから、私は、なけなしの勇気をかき集め、アキトの部屋へと向かった。

危険な儀式を姉が執り行おうとしているという、どこか現実味のない、けれども確かな事実が、私は怖かった。アキトに大丈夫だと言って欲しかったのかもしれないし、姉が不安になど思っていないことを聞きたかったのかもしれない。

アキトの部屋に来たときも、まだ少しだけ迷う気持ちがあった。それに、もう夜も遅い。妻が夫を訪ねるのに、時間など関係ないのだろうが、私たちは名ばかりの夫婦である。突然来られても、アキトは戸惑うだけかもしれない。

けれども、躊躇する思いよりも、結局、胸の中にわだかまる不安の方が勝った。

覚悟を決め、深く息を吐いて、私は扉を叩こうと手を持ち上げる。

視線を感じたのはその時だったと思う。

いつか河原と同じ。いや、それ以前から感じていたあの視線。

それが、こちらに向けられているのがわかった。

振り返っても、そこには寒々とした廊下が広がっているだけで、人の気配もない。

それなのに、視線だけは感じるのだ。

得体の知れない恐怖が、沸き上がってきた。

悪意を感じるからというだけではない。それは近くにいて、すぐにでもその手を伸ばして私を捕まえようとしているようにも思えたのだ。

恐怖に萎縮して動くことができず、この視線が早く消えてしまえばいいと、祈りにも似た気持ちで目の前の扉を見つめる。

少し足と手を動かして、扉を叩けば、全ての呪縛は解けるかもしれない。

けれども、それができない。

怖い——足も、手も、震えている。

がちがちと歯が鳴るのも、気のせいではない。

逃げることも、叫ぶこともできず、ただその場に立ち尽くす。

コレは、何なのか。何が起こっているのか。確かめる術を持たず、震えるだけの自分を情けなく思うけれど、行動は何一つ起こせない。どのくらいそうしていたのか。

おそらくそれほどの時間ではなかったのだと思うけれど、異変は

突然終わりを告げた——ふいに開かれた扉から、怪訝な顔をしたアキトが顔を出した瞬間に。

あれほどまでに、体を震わせたものだったのに、夢だったかのように、気配も視線も全て消え去ってしまったのだ。

戸惑う私がきよろきよろと辺りを見回していると、アキトの溜息が聞こえた。

それで、我にかえる。

自分の行動の怪しさに、気が付いたのだ。

私を見つめるアキトの目にも、困惑が見て取れる。

「誰かの気配がすると思ったら、カナだったのか」

尋ねる声は冷たかったけれど、私は縋るように彼を見た。

このまま一人で部屋に帰るのは嫌だったし、この部屋に来た目的を思い出したからだ。

奇妙な出来事に惑わされてしまったが、私がここに来たのは、どうしても聞かなければならないことがあったからだ。

先ほどの出来事を忘れることは出来なかったけれど、だからといって、戻るわけにもいかない。頭を無理矢理切り換えて、私はアキトに話しかけることだけに集中した。

「あ、あの！ 話があるの。……雨乞いの儀式のこと」

私の必死の形相に、アキトは驚いたようだったが、「わかった」と言っただけ私を招き入れてくれた。

けれど、その時のアキトはひどく疲れているような気がして、私はさきほどとは違う怖さを胸の内に抱いたような気がする。

アキトの部屋の中は、明かりも少なく夏の夜だというのにひんやりとしていた。

見た目も殺風景だ。余計なものが置かれていないせいかもしれない。私の部屋だって、それほどたくさんものがあるわけではないけれど、ここよりずっと生活感はある。

落ち着かない気持ちで、すすめられるままに椅子に腰かけると、硬い表情のアキトが私の前に座った。

「儀式は、失敗するかもしれない」

前置きもなくアキトが言った言葉はそれだった。

まさか、と思った。

姉の力は強い。

確かに命を賭けた儀式ではあるが、姉ならば可能だと、私は思っていたのだから。

けれども、アキトの思い詰めたような表情に、私は否定の言葉を口にすることが出来なかった。

「力が足りないのではない」

アキトは小さく首を振った。

「神の樣子が、おかしいのだ」

「それは、どういう意味？」

祈りを捧げるべき相手が変わたとはどういう意味なのか。

「荒ぶり方が普通ではないらしい」

「普通ではないって、どういうことなの？」

しばらくアキトは躊躇っていたけれど、覚悟を決めたのか、それとも誰かに話さずにはいられなかったのか。少しずつ、起きていることを話してくれた。

水の不足は、ミズナが言っていたように、しばらく前からあったのだという。

巫女姫や、大勢の巫女達が祈りを捧げたがそれは効果がなかった。それどころか、巫女たちをあざ笑うかのように、祈りを捧げた時に限って、事態が悪くなるのだという。

「だからかもしれない。神はお怒りだと言う話が出てきたんだ」
私たちが祀るのは、穏やかで慈悲深い存在ではない。荒ぶる神なのだ。

だから、神が時々、災いをもたらすことは知っている。
けれど、それは本当に怒りなのだろうか。怒りならば、もっと大

きな災いが起こるのではないか。

いや、そもそも神の状態を把握していることが、巫女姫の役割ではなかったのか。

「神と話せるのは、巫女姫だけでしょう？ 神がお怒りかどうかなんて、巫女姫以外わからないんじゃないかな」

「そうだな。だが、巫女姫は何も言わない。沈黙したままだ」

「神がどんな状態なのかを口にしないの？」

「ああ、何も。嘘でも何でも、何かを告げれば、人々は安心するだろうに」

その言葉に頷いたのは、自分自身がそうだったからだろう。

詳しく知ってしまうのも恐いけれど、何もわからず漠然と不安だけがあるのも恐ろしい。

そんな状況で、儀式が失敗したと知られば、皆はどう思うのだろう。

「儀式は、いつ？」

「三日後だ」

「……儀式は止められないの？」

「俺が何かを言って、それが聞きいれられると思うか」
思えなかった。

「彼女は神殿にとっても大切な人だ。今、彼女を失うわけにはいかないはずなんだ」

真剣な眼差しに、私の胸が少し痛んだ。

まっすぐに迷いのない眼を向けるのは、いつだって私ではなく姉だということに気付かされるからだ。

「アキトは、本当に姉さんのことが、好きなんだ」

呟いた言葉は、自分の中に重く響いた。

姉と私とアキト。

この危うい関係を作っているのは、他ならぬ私なのだ。私がいなければ——あのまま、ミズナと共にひっそりと暮らしていれば、こんなことにはならなかったのだろうか。

「何を勘違いしているのか知らないが、彼女とは幼い頃から兄妹のように過ごしてきたんだ。心配するのは、当然だろう。……次期巫女姫でもある存在だしな」

そう言いながらも、アキトの視線は、微妙に私から逸らされていた。

室内に、気まずい空気が漂う。

「……………神がどういう状態かわからないまま儀式を行えば、姉さんが危ないとアキトは思っただね」

「憶測にしか過ぎない」

だけど、アキトも私も知っている。儀式が成功してもしなくても、命を落とす巫女がいるのだということを。

しかも、今の神の様子は尋常ではないという。

「巫女姫は、そんな大事な儀式に、自分ではなく、姉様を使うというんだよね。どうして？」

こんな状況なのだ。本来ならば、巫女姫が儀式を行うはずなのに、何故姉なのかというのは、気になっていた。

どれだけ神の怒りが強いかわからないが、巫女姫が無理ならば、誰がやっても駄目だというくらいに、あの人の力は歴代の巫女たちの中でも抜きん出ている。

「マヒロは、疎んじられているから」

私の問いに対するアキトの言葉は、答えにはなっていない。

だが、違うとも言えなかった。

姉は、巫女姫の娘で、力も強く将来の巫女姫候補でもある。

それは誰もが認めることだ。姉よりも強い力を持つものも、今のところ生まれてはいない。

だから、他の巫女のように、簡単に姉を使い捨てには出来ないはずだった。

彼女が儀式に失敗して命を落としてしまえば、強い力を持つ者は、巫女姫一人になってしまう。彼女は、もう若くない。一番血の濃い彼女から、子供はもう生まれてくることはないだろう。

それにもかかわらず、強い力を持つ姉を使うのは、それが国にとって大切な儀式だから。

通常ならば、そう考えるべきなのだろうが、漠然とした違和感を持つてしまうのは、巫女姫と姉の確執を知っているからだ。

私と巫女姫の関係も端から見れば冷めたものだっただけで、それは仕方がなかったのだと思っている。生まれた時からミスナに預けられていたし、神殿に引き取られてからも、ほとんど会うこともなかった。

でも、姉は将来の巫女姫候補として、ずっと神殿で暮らしていた。父親も、身分の高い人だから、神殿に連れてこられた頃は、姉は愛されているのだと、私自身も思っていた。

けれど、現実とは違っていた。

姉と巫女姫の間にあるのは、普通の親子のそれではなかった。

常に穏やかな口調と砕けた雰囲気で他人に接している姉が、巫女姫に対してだけはいつも硬い表情を向けている。話し方だって、敬語でよそよそしい。対する巫女姫も、鬱陶しいものでも相手にするかのように言葉そのものに棘がある。

巫女姫は、自身の夫であった男を嫌っていたとも聞いていたから、そのせいもあるのかとも最初は思ったけれど、二人の間にはもっと深い溝があるようにも見えた。

何を思っ、今回の儀式を姉にやらせるのかわからないけれど、少なくとも姉が失敗したとしても、巫女姫は顔色ひとつ変えずに事実を受け入れるだろうということだけは理解できた。

あの人は、そういう人なのだ。

私は、姉のことを特別大事だと思っていはいないし、姉に対して思うところがないわけでもなかった。

でも、巫女姫の姉に対する理不尽な態度だけは、納得できない。親子でも相容れないこともあると知ってはいたけれど、それにしても解せないことも多すぎた。

「儀式は、神の住むあの森で、巫女一人が行うんだよね」

「ああ、そう聞いている」

「……神の森に忍びこめないかな」

「は？」

「うん、だから、忍び込めないかなって思ってた」

アキトが大きく溜息をついた。

「君は時々とんでもないことを言うな」

「そう？ 姉さんを助けたいんでしょう。でも黙ってなりゆきを見守っていたら、姉さんは儀式の途中で死んでしまうかもしれない」

だから、そうならないように儀式を見に行く。もし、儀式に予想外の異変が起こりそうならば、姉を助ける。

とても単純でわかりやすい結論だとは思って。もちろん、自分でも無謀なことだとはわかっていたけれど。

それに、どうしてだろう。

あの不思議な森。

神が住まうという森が気になって仕方がなかった。中がどうなっているのか、神はどんな姿をしているのか。何故巫女だけがあの森へ入ることを許されているのか。

……あそこにいるのは、本当は何なのか。

神と崇められながら、同時に閉じ込められた存在。

この国の始祖たちに一度は倒された存在。

どうしてなのか、私は『神』というものの存在に心惹かれるのだ。見てみたい、という衝動を抑えきれない。

「行っただうにかなるものでもないだろう」

アキトは、顔をしかめたまま、怒ったように言う。

その声で、冷静になった。自分は何を考えていたのだろう。

私がしたいと言ったことは、禁忌だ。

儀式に参加しない巫女が森へ入るのは許されていないわけではないが、下手をすればさらに神を怒らせることになる。

けれど、私には、自分の意見を曲げる気は、その時は本当になかったのだ。

「ないかもしれない。でも、何か裏がありそうな気がするんだよ。元巫女としての感だけれど」

「感だけで、儀式の邪魔をすることは許されない。それこそ神を怒らせることになる」

アキトの言うことは正しい。

それなのに、反撥しかなかった。

「そうなんだけど、なんだか嫌な感じがするし。どうせ儀式が失敗してもしなくても神は怒っているんでしょう」

「まだ、3日ある。どこまで出来るかわからないが、打てるだけの手はつつもりだ。だから無茶なことはあまり考えないでくれ」

アキトも譲らない。確かに妻である私が、禁を犯せばアキトにだって害が及ぶだろう。頭ではわかっていいるはずなのに、頷けない。

「でも、もし3日たってもどうにもならなかったら？ その時はどうするの？ まさか、アキト一人で行くつもりじゃないよね」

私を止めたとして、アキト自身はどうなのだろう。

彼ならば、姉を救うために、禁を犯すことを躊躇わないかもしれない。例え自分が罰せられることになったとしても。

「危険なんだ。例えば、俺だけならば、なんとかなる。だが、何かあったとき、どうするんだ？ 君は剣だって使えないだろう」

「でも、巫女がいないと、あの森へは入れない。確かに私は結婚して神殿を出たけれど、巫女でなくなったわけじゃない」

この言葉が自分で正しいと思っていたわけではない。

神殿で巫女になる儀式は受けたから《巫女》には違いないが、自分には巫女の力はない。そんな自分が森へ入ることが出来るかどうかは五分五分というところだろう。

それは、アキトだって知っていたはずだ。

「アキトは、姉様が大切なんでしょう。こんな理不尽なことで、死んでしまってもいいの！」

どうしてそんなことを言ってしまったのか、わからない。

本当は、思ってもいないくせに。

心のうちにあるのは、姉の無事ではなく、悲しむアキトを見たくないという思いなのに。

だが、アキトは私が口にした『死』という言葉に、動揺した。青ざめた顔が、見たことがないほどに歪んでいる。

「……わかった。ただし、絶対に無茶はしないと約束してくれ。いくら彼女を助けるためとはいえ、君が怪我をしてしまったら、意味がないだろう？ それに忍び込むのは最終手段だ」

彼が妥協したのは、やはり姉を失いたくないという一心なのかもしれない。それでも、彼の言葉の端に、少しだけでも私を心配する気持ちが見えたことを喜んでしまう。

やはり、私はひどい女なのかもしれない。

姉が訪ねてきたのは、翌日のことだった。

お忍びなうえに、アキトがいない時間帯を狙ってきたのだという。お願いがあるの」

そう言った姉は、以前よりも随分やせたようにも見えた。

招き入れた自室で、姉は倒れ込むように椅子にかける。それは今まで見たことのない姿だった。

まっすぐに前を見て、迷うことなく歩いていた姉はどこにもいない。

「カナは、雨乞いの儀式のことは知っている？」

「詳しくはないけれど、大体のことは」

「そう」

深く息を吸い込み、姉は困ったように私を見る。

「では、神殿の態度に民が不満を持っていることも知っていた？」

「なんとなく。噂だけだけれど」

嘘をついても仕方ないから正直に答えた。

姉はそういう駆け引きは嫌いだし、回りくどく腹を探り合っても仕方ないだろう。

「私には、巫女姫が何を考えているのかわからない。民を導かなければいけないのに、何もせず、事実を伝えようもしない」

姉の虚ろな目は、どこも見ていなかった。

ただ遠く――神がかかる巫女が狭間を覗き込んでいるような眼差しをしている。

「このままでは、この国は滅びてしまう」

大げさな言い掛けた言葉を呑みこむ。

姉は真剣だった。

「儀式が成功しないと、水はどんどん涸れていく。わかるのよ、神が水を涸らしている。でも、私の力ではきつと神を鎮めることはできない」

「やってみないとわからないよ」

我ながら、白々しい言葉だと思った。姉がこのときほんの少し顔を歪めたのは、私の言葉に心がこもっていないことに気が付いたからかもしれない。

「理由がわからないの。神が怒っている訳が。巫女姫ならば、わかるのかもしれないけれど、私には教えてくれない。……何度もお願いしたのに」

唇を噛みしめたまま、姉は苦しそうに言う。

その時になつて、初めて姉の肌も唇もかさかさに乾いていることに気が付いた。髪にも艶がない。いつもきちんと身だしなみを整えていた姉しか知らなかったから、私は驚くと同時に姉も自分と同じ『人』なのだと思い知らされた。

「私が儀式を行えば、絶対に失敗する。神の真意がわからないのに、何を祈ればいいのか」

姉の泣き言を聞くのは、このときが初めてだったかもしれない。

「……そのことを、アキトは知っているの？」

「いいえ。話していないから」

話せるはずがない、と姉は笑う。

どうしてとは言えなかった。姉が継るべき相手はアキトなのに、

彼の隣には私がいる。私が姉の邪魔をしているのだ。

それを今更ながらつきつけられた気がして、ひどく気持ちが沈んだ。

「神に対して私がどこまで出来るのかわからないけれど。頑張ってみようと思っている。でも」

姉の視線が私に注がれる。

強い意思を秘めているけれど、どこか恐ろしさを感じる眼差し。

そういえば、姉は何のために私の元に來たのだろう。

お願いがあるのだと姉は言っていたはずだ。

わざわざ儀式が失敗するかもしれないと告げにきたのだとしたら、おかしい話だった。

元巫女である私に話すのは筋違いだし、それ以外のことで姉に頼まれるようなことは何もない。なにしろ、私と姉は姉妹とはいえ、そこまでお互いの本音を言い合ったことなどなかったのだから。

「もし、私が儀式に失敗したら——私がいなくなってしまうたら、あなたがアキトを止めて」

「アキトを止める？」

聞き返して、すぐに自分が馬鹿な質問をしたのだと気が付いた。

姉はアキトを大切に思っている。おそらく、アキトも。

そんな彼が、もし姉の儀式の失敗を知ったらどうするだろう。大人しく受け入れるだろうか。それとも。

……最悪のことが頭に浮かんだ。

アキトは、まっすぐに純粋な人でもある。姉を失って、平静を保てるのだろうか。

私が『死』という言葉を口にしたときの、アキトの顔を思い出し、てしまう。

「こんなことをあなたに頼むなんて、ひどいことだってわかってい。だけど、あなたにしか頼めない。でもアキトの無茶を止められる人がいるとしたら、あなただと思っ」

それは違う。

アキトに必要なのは、姉だ。私じゃない。どうしてそれが姉にはわからないんだろう。それともわかっていて、そう言っているのだろうか。

「あの人は、強くあろうとしているだけ。いつも無理ばかりしているんだもの」

「そんなの……わかってる」

私だって、アキトのことをずっと見ていたのだ。

姉に言われなくなつて、そんなことは知っていた。

「そうだったわね」

姉の顔に浮かんだのは、諦めとも、安堵ともつかない不思議な笑みだった。

「いなくなるなんて、簡単に言ったらだめだよ」

姉のことよりも、アキトの方が心配で、私はそう言ってしまった。勝手なことだつてわかつていたけれど。

「もちろん、儀式に手は抜かないわ。うまくできるかわからないけれど。約束する」

姉は、アキトや私が儀式の邪魔をするかもしれないということは知らない。

知ったら、どうするのだろう。止めるのだろうか、救いを求めるのか。

姉の性格ならば、必ず止めさせようとするはずだけれど、内心まではわからない。私が思うこととは違うことをするかもしれないのだ。

それに、その言葉が言えなかったのは、姉の思い詰めたような目差しが恐かったからだ。言えば、二人の関係が変わってしまうかもしれない。

姉は、アキトが無茶をすることを怖れて、彼のことを私に頼む。

アキトは、私の無茶を止めようとしながら、結局は自分が無茶をしていまいそうな様子だ。

二人とも、なんて馬鹿なのだろう。

お互いがお互いを思っているのに、相手のことばかり考えている。立場があるからという、そんな言葉で、互いを縛っている。

後から現れて割り込んできた私や、二人を引き裂いた巫女姫を恨めば楽だろうに。そんなことなど、出来ない人なのだ。

本当に、二人とも馬鹿だ。

そして、真実を伝えることをしなかった私も、馬鹿だったのだろう。

11・昔日（六）

真正面からは入れない。

どうやって、座所まで行くのか？

そう尋ねた私に、アキトは古い道を知っていると云った。古い時代に使われた道を、彼は調べていたのだ。

その時のアキトに、迷いはなかった。

彼の目は、まっすぐに、睨み付けるように、ひとつの場所に向けてられている。

そこには、禍々しい気配を隠しもせず、邪悪なものが住む場所のように変貌してしまった、森があった。

*

*

*

「君は神殿で、道からはずれないような方法を習っただろう。俺が道をはずれそうになったら、教えてくれ」

2年前、アキトは私に向かって硬い表情でそう告げた。

誰がどうみてもせつぱ詰まっている様子だったと思う。

今にも駆け出したい衝動を必死で抑えているのかもしれない。アキトに儀式のことを尋ねてから、3日。

結局、何の進展もなく、儀式の日を迎えてしまった。

実は、あの日、姉のことがあってから、私は一人で森の様子を見にいくつもりでいたのだ。

どう考えても、アキトを巻き込むわけにはいかなかったし、儀式に乗り込むこと自体、アキトは反対していたのだから。

でも、あっさりと、アキトにはばれてしまった。

森へ行く途中で、神殿に行っていたはずのアキトに見つかり、揉めた。

帰る帰らないで口喧嘩になって、互いに譲らない状態になって。

そんな時、それは起こったのだ。

最初は声だった。

誰かを呼ぶ声。

何かを待つ声。

それが、森から聞こえてくる。こんなことは初めてだった。

私とアキトは、揉めていたことを忘れて、顔を見合わせた。

そういえば、いつもは静かな森の中が今日はざわついている。肌
に感じる風も生ぬるく、まとわりつくようだった。

「森で、何かあったの？」

「そうかもしれない」

アキトの顔が陰っていた。

「誰も気が付かないのかな」

「今日、森の近くは人払いされている。おそらく、ここにいるのは
俺たちだけだろう」

私は頷いて、森を見た。

見慣れていたはずの森が禍々しい気配で染まっている。

怖いと思った。

でも、姉はこの中なのだ。たった一人きりで。

「行こう、アキト」

私が言くと、彼も頷いた。

走り出したい衝動にかられるけれど、道はずれば、出られな
くなる。ましてやこの状況なのだ。

私とアキトは、あせらないことにした。

無茶をすれば、生きて帰れない。そんな気がしたのだ。

「巫女姫は、結局最後まで、マヒコの願いを聞く事はなかったよ」
どのくらい歩いたのだろう。

それまで無言だったアキトが、ふいに口を開いた。抑揚のない声
は、誰かに聞かせるというよりも独り言のようで、私の反応は一瞬

遅れる。

「姉様の、願い？」

巫女姫に対して、何を姉は願ったというのだろう。

「これが最後になるかもしれないから、一度でいい、私を娘として見てください、と。巫女姫は、マヒロを名前で呼んだことさえないんだ」

姉とは何度か神殿内で話したが、巫女姫と私は殆ど接点がない。

親子ではあるが、儀式以外で、3人が同時に揃うことはなかったとも思う。だから、姉が普段、母親をなんと呼んでいるのか、その逆はどうなのかなど、知らない。

「他の巫女は名前を呼ぶのに、私は違う。カナでさえ、名前を呼ばれるのに、どうして自分はだめなんだと、俺に言ったことがあった」

「私は、別に巫女姫に愛されてなんていないよ。どっちかっていうと、目にはいつていないっていう感じだったし、利用する相手って思っていた気がする」

「そうだな。でも、他の巫女と同程度には扱っていた」

自分では意識してはいなかったが、他人から見ればそうだったのかもしれない。

「巫女姫はマヒロの父親——自らの夫を、憎んでいた。婚姻にしろても、かなり強引なことをしたというからな」

「強引なこと？」

「巫女姫には、思い合った婚約者がいて、正式に婚姻を結ぶ筈だった。だが、巫女姫に懸想していた彼は、その相手を陥れ失脚させらしい。俺も詳しいことは知らないが、かぶせられた罪のせいで、一族はほとんどが罰せられたり殺されたという。……あくまで、噂、だがな」

巫女姫の夫を殺したのは、私の父親だという別の噂を思い出し、複雑な気持ちになった。

そういう事情があったから出た噂なのかもしれない。母が自分の夫を憎んでいたという、事実。

「俺は、しがらみからマヒ口を救いたかった。側にいて、守りたかった。……もうそうすることは出来ないが」

アキトは、ずるい。

どうして、今、そういうことを言うのだろう。

私を前にして、今更言うことなのか。そんなことを口にするならばつきり拒絶してもらった方がよかった。下手な期待などもたせず、形だけの妻だと言ってくればよかったのだ。

「……すまない」

どうして、謝るの。

喉元まででかかった言葉を、私は呑みこんだ。今ここで謝罪を受け入れるの気にはなれない。

「もし、儀式が無事終わったら、君に話したいことがある」

決意を秘めたアキトの言葉に、私は唇を噛む。

それはきつと、自分にとっては辛い言葉なのだと、そう思ったからだ。

返事をしなかった私に、アキトは何も言わなかったけれど。

それからの私たちに、会話はなかった。

話すことがなかったわけではないけれど、どちらも互いに口を聞く気分ではなかったのだ。

けれど、その方がよかった。

進めば進むほど気持ち悪さが強くなっていったし、周りを見る余裕もなくなってきたからだ。

やはり、森で異常事態が起きているのだ。

アキトもそう考えているのか、背中がこわばっている。

本当ならば、私はこれ以上、進みたくはなかった。重い足は動きを止めそうで、時々足元の草や根に引っ掛かりそうにもなる。

よるめくたびに、アキトに気が付かれていないかと様子を窺っていたけれど、彼も余裕がないのかもしれない。前しか向いていない

彼の背中が、どこか鬼気迫るものがあつたのだから。

やがて、私たちはひらけた場所に出た。

アキトが私を制する。うかつに飛び出すなということだろう。

その腕がわずかに震えているのに気づいて、私はそつと彼の後ろから、覗き見た。

「え……！」

息が一瞬止まる。

なぜなら、そこにいたのは姉と——それから、見たこともない生き物だったからだ。

ぬるりとした浅黒い皮膚。

金色に輝く三つの目。二つに裂けた尾からは又メリをおびた液体が滴り落ちている。

人とは違う——けれども形としては人を思わせるそれに、私は背筋に得体のしれない何かが這い上ってくるような感覚を覚えた。

「あれが、神様なの」

声が震えているだけで済んだのは自分でも意外だった。

あるいは、目の前のものが信じられなくて、頭が現実を受け止めるのを拒否したのかもしれない。

「そのようだな」

返事をしたアキトの声も微かに震えていた。

私は、それまで神はもつと美しく気高いものだと思っていた。

神殿ではそう習ったし、神様と名前が付くくらいなのだから、例え荒ぶる神でも畏怖するような外見を持つのだと、素直に信じこんでいた。

だけど、これは何なのだろう。

この恐ろしい生き物は何なの？

これが神なのだとすれば、過去に荒ぶる神と言われたのも納得できる。いや、むしろ災いをもたらす存在だと言われても頷くだろう。そんな神を姉は呆然を見つめていた。

神子装束の裾は汚れ、履いていたはずの靴もない。

ただ私たちと同じように震えていた。

「神よ」

震える姉の声は、神に届いているのだろうか。

「古よりこの地に住まう偉大なる神よ」

けれども、神はなんの反応も見せない。三つの目は確かに姉の方に向けられているのに。

「なぜ儀式に答えてくださらないのですか。私は何か間違ったの…」

…」

その時、ようやく私は気が付いた。

姉の前には、壊れた祭壇あった。姉の服も乱れている。私たちがここへ来たのはかなり遅れてのことだ。

儀式は一度行われたのだ、きっと。そして、うまくいかなかった。儀式などただの形式に過ぎぬ」

どこからか響いた声に、姉の動きは止まった。私たちもだ。

「娘よ。お前は儀式の真の意味さえ知らされていないのだな」

高い、木々を震わせるような声は、耳障りで不快なものだった。背筋に嫌な汗をかく。

「哀れではあるが……お前では私の空腹は収まらぬ。お前は余りにも清らかすぎる」

そう告げながら、それは、吠えた。

空気が、嫌な感じに震える。

「どうやら、当代の巫女姫に育てられたわりには、何ものにも染まらずにいたようだ。だが、そんなものはいらぬ」

神の身体が揺らいだ。

まるで、蜻蛉のように、ゆるりと周りの色に溶け込む。まばたきひとつする間に、色をかえ、再び視界に捕らえた時は、まがまがい緑色を纏っていた。

『いね』

一瞬のことだった。

神の身体が揺らいだと思った瞬間、辺りが揺れた。

身体の底が芯から冷えるような、高い音が響く。

何が起こったかわからなかった私は、姉の悲鳴で我にかえる。

目の前で、姉の華奢な身体が吹き飛ばされるのが見えた。自分の身体も、吹き付ける風に立っていられなくて、転がっていく。

「マヒロ！」

同時に、姉を呼ぶ悲痛な叫び声が聞こえる。

アキトがまっすぐに姉のところへと駆けていった。すぐ近くにいたはずの私には、一瞥もくれなかった。

迷いもなく、姉を庇うように神の前に立ちはだかる。

姉を害する全てのものから、姉を守るように。姉が泣いてやめたと叫んでも決して動かない。

彼の目には、姉しか映っていない。

いつだって、どこでだって、そうだった。一番は、姉。私は彼女の妹に過ぎないのだと。

私はずっと、頑張っていたら、報われると思っていた。

政略結婚だし、互いの中に愛があるとは思えなかったけれど、年月を重ねていけば、それなりの関係を築けるのではないかとわずかな希望だってもっていた。

世の中には、アキトと自分のように、政治の駆け引きで婚姻関係を結ぶ者は大勢いる。その誰もが不幸になっているわけではない。

だけど、そんな思いは、全部、間違いだったのかもしれない。

あの人が迷いもなく駆けよったのは姉だった。

姉も、アキトのために、涙を流して助けを請うていた。

それを見れば、二人が思い合っているのはわかる。

邪魔だったのは私の方だ。

いらない存在だったのは、私。

心の奥底にあった、気付かないふりをしていた思いをはっきり自覚してしまう。

地面に叩きつけられ、風に飛ばされないように必死で近くの木にしがみつく私を、姉もアキトも見てはくれないことが、さらに惨め

だと思った。

その時だった。

はつきりと、悪意を持った『何か』が私を見た。

『何か』——いや違う。これは神だ。神が悪意を私に向けている。

何故？

さきほどまでは、こちらなど見もしなかったというのに。

『哀れな娘』

耳ではなく、内から聞こえる音無き声は、確かに私を嘲っていた。嫌な感じだ。顔を上げた私は、神の目の一つが自分に向けられているのを見た。

『誰からも、望まれない子』

否定したかったのに、できなかった。

母は一度私を捨てた。

姉もアキトも優しくかったけれど、一番大事な存在にはなれなかった。

でも、一番ではなくても、嫌われていたわけじゃない。

「私は可哀想なんかなじゃない」

哀れまれるのは嫌だ。。

蔑まる理由なんか、ない。

『可哀想な娘。お前の方から、やってくるとは手間が省けた』

それでも、『神』は繰り返す。

『我が喰らってやろう。我がお前を望んでやろう。古の契約通り、儀式を受け入れ、かの者の血を引くお前を喰らい、この国を豊かにしよう』

「儀式を受け入れる？」

先ほど、姉に向かつて、拒否したのではなかったか？

なによりも、私には巫女としての力はない。儀式は力によって行われるのではないのか？

ならば、どうして？

どうして、私なの？

わからない。

巫女なら、誰でもいいというのならば、伝えられた伝承は、全て嘘なのか。

『力は強い方がよい。だが、そなたは、“力”の意味を取り違えている』

神の言葉は、初めて聞くものばかりだった。

神殿で、私たちが読めるような書物には、何一つ書かれていないこと。巫女姫ならば、知っているのかもしれないが、私は娘とはいえ、ただの力なき巫女に過ぎないのだ。

『我らにとつて、力とは、そなたたちに流れる“血”そのもの。濃ければ濃いほどいい。そこで震えている娘や、お前がそつだ。その血を喰らうことによつて、何百年かに一度やつてくる飢えを、満たすことが出来る。飢えが満たされれば、力も満ちる。さすれば、再びこの地に水をもたらすことも出来よう』

何故か舌なめずりが聞こえてくるような気がした。

だが、質問の答えではない。

ならば、何故、姉ではなく私を望むのか。血の濃いのは姉のはずなのに。

『おいで、哀れな娘』

神の呼び声に、私の体は、意思とは関係なく立ち上がり、足を踏み出す。

行きたくないと、嫌だと、心は叫んでいるのに、体が言うことを聞かない。

助けて。

声を出そうと思ったのに、口さえ動かなかった。たすけて。

振り返ろうとしたのに、やっぱり体が動かない。タスケテ。

あの人の名前を呼ぼうとして、呼べなかった。

呼んでも、どうにもならないから。

だって、あの人は、姉のために、命をかけた。

私ではなく、あの人を選んだ。

ああ、違う。

最初から、もうずっと、あの人の心は、姉にあった。

私が入り込む余地なんて、ひとつもなかった。さきほど、それを知ったばかりではないか。

『そうだ、可哀想な娘。最初から、お前はいらなかったのだ』
違う。

叫んだ言葉は、音にならなかった。

何度口を動かしても、声にならない。

『お前の母親は、我に憎む相手を滅ぼす力が欲しいと願った。だから、我は強き力を持つ男——お前の父親を巫女に与えた。その時、自分の娘を私にくれると。すでに産んだ子供も、これから産むであろう子供も。好きなものを選べと、誓約したのだ』

嘘だ。

そんなの、嘘だ。

『誰からも望まれる娘などいらない。必要とする者がたくさんいる娘は面白くない』

歌うような声は、頭をかき乱す。

『だから、何も無いお前を、我が望んでやろう』
真っ白だ。

白くて、まぶしくて、痛い。

焼き尽くすような光に呑みこまれながら、ようやく気が付いた。

この声と、視線。

これは、ずっと私を見ていたものだ。いつからか、執拗に私を見続けていたあの視線は、神だったのか。

ならば、最初から、私に逃げ道はなかった。

そう思ったのは、ずっと後になってからだったけれど。

気がついた時、雨の降る中、立ち尽くしていた。

何故生きているのか、どうしてここにいるのかわからなかった。

激しく雨が降っているという事実に、私は、「ああ、この国はどうやら救われたのだ」とぼんやりと思った。神は私を喰らい、力を取り戻したのだろう。

ただ、私自身は、どうしたらいいのかわからなかった。

神殿に戻るべきなのか。

そもそもここはどこなのか。

何をどうするべきなのかさえ見失ってしまった私は、どのくらいそうしていたのか。

「あんた、何やっているんだ？ 大丈夫か？」

誰かに、声をかけられた。

男の人の声だった。

「ずぶ濡れじゃないか。ほら、こっち来い」

そう言って差し伸べてくれた手を取ったのは——その人の目が優しくかったからだけではなかったのかもしれない。

黒かった髪は、色を失った。

肌に刻まれた紋様は、神に喰らわれた証。

帰る場所を無くし、名前も姿も失ってしまったけれど。

その時触れてくれた指先の温かさを、今でも忘れない。

12・神の棲む森

2年前と同じように、私は森の中にいた。

相変わらず、湿った空気が肌にまとわりつくようで気持ち悪い。生き物がいないわけではないだろうが、虫や鳥の鳴き声さえしないのも不気味だ。やはり、ここは『神』が棲む場所なのだと思います。される。

歩くのは、同じ道だけれど、あの日と違うのは、私一人ということ。

記憶にある道を、ゆっくりと進んでいく。

茂った草や木々は、前よりももっと悪い状況で、あれ以来、誰もここを使っていないのだとわかる。

正規の道ではないのだから、当然といえばそうなのだけれど、途切れそうに細い道は歩きにくくて、なんだかむかついた。

それでも、森は私を拒まない。

居心地はよくはなかったが、この森に住む『神』が許しているのか。

わからないけれど、進むしかなかった。

この国で聞きたいことに応えてくれるのはあれ——『神』だけだろうと思っていたから。

森を抜けると、そこにはまるで私を待っていたかのように『神』がいた。

『神』は3つの目を全部私に向けると、身を震わせる。あの時以来忘れていた恐怖が蘇る気がして、私はそれを振り払うように足に力を入れた。

こいつの前で醜態をさらしたくはない。

『愚かな娘。帰ってきたのだね』

相変わらずの、人を馬鹿にしたような響きを持った声に、私は顔を顰める。

「……帰ってきたわけじゃないでしょ。ここに来ざるを得ない状況になったのよ」

『そのようだな。聞きたいことがあるのだろうか？ 我に頼らざるをえないとは、哀れなことだ』

あんたがそれを言うのかと突っ込みたいのを辛うじて押さえ、私は神を睨み付けた。

私が派手に動き回れない理由を一番知っているのはこいつなのに、けれど、こちらの手の内を読まれているは、ありがたい。

余計な手間が省けるからだ。腹立たしくはあるけれど。

「どうということなの？ アキトは、どうして神殿にいないの？ ……私がいけない間に何があった？」

『巫女姫——お前の母親が死んだことは聞いているか』

「ええ。風の噂で」

逝去の話は、遠く離れた異国の地で知った。それも、随分遅れてのことだ。母に抱かれたことも、優しい言葉をかけられてこともないから、彼女が死んだと聞いてもあまり悲しくなかった。

ただ、これで姉が自由に恋が出来ればいいと思った。

『あの男は、生死のわからないお前を捜しているのだ』

「どうということ？ 私は行方不明のままなの？」

『そうだ。あの時は、我も暴れすぎたからな。この森一帯もひどい有り様で、あの娘が気がついた時、森にいたのは、あれと、男だけだったのだよ。我もすっかり満足して、気配を消して籠もってしまったからな。何がどうなったのか、おぼろげにしか、わかっていないはずだ』

私も、自分が神に喰われた後、どうやって外に出たのか覚えていない。

もしかすると、私を外へと飛ばしたのは、神ではないかとは思っているけれど。

何もわからず、森に残されれば、姉だってアキトだって、戸惑うだろうし、私を捜すだろう。

結局、私を見つけることはできなかったけれど。

『あの男の落ち込みようはひどかったな。自分のせいだと攻め続け、今も立ち直れずにいる。それに、何の力もないとはいえ、やはりお前も先代の血を引く巫女の一人。生きているかもしれないのに、他の女を娶るわけにもいかず、このままだと跡継ぎを作ることも出来ぬ。……もつとも、巫女姫自身は、禁を犯したあの男を許し、お前を探す必要はないと言っていたがな。あれは、お前がどうなったのか、よく知っていた。そして、民に、儀式を為したのは、次代の巫女姫であるあの娘だと告げたぞ』

儀式の本当の内容を知るものが少ないのであれば、皆その言葉を信じるかもしれない。

姉とアキトがどう思っているのかわからないけれど、あの場にしたのだから、巫女姫の告げたことに不満を覚えるかもしれない。

『巫女姫も罪なことだ。自身の娘に、一生嘘で塗り固めた偽りを生きるよう、強要したのだからな。あの娘は、お前が儀式を為したことを覚えていて。お前が生きていようと死んでいようと、その事実が変わらぬからな』

巫女姫——母は、そこまで姉のことを疎ましく思っていたのだろうか。

母が死んでしまった今となっては、もうわからないけれど。そこまでの思いを抱えて生きてきた巫女姫を、初めて恐いと思った。

けれど、もう母はいない。

姉も、アキトも、そして私も、いい加減、このどうしようもない関係から開放されてもいいのではないだろうか。このままでは、誰も幸せになんてなれない。

「私が死んだと、もういないのだとわかれば、アキトは、解放される？」

私が巫女姫の娘でなければ、アキトだって、いつまでもこだわる

こともなかったのだろう。行方不明になって、2年立つ。まったくその間消息が掴めないのなら、国に申請して、死んだということにだって出来るはずだった。

それが出来なかったのは、例え父の出自がどうであれ、巫女姫の血を引いているというだけで、尊ばれる国だからかもしれない。行方不明だから、死んだことにしてしまえと単純にはいかないのだろう。

巫女の血は、外に出すわけにもいかないものなのだし。

『どうだろうな。だが、少なくとも、お前を捜して歩くことはなくなるだろう。立ち直るかどうかは、本人次第なのではないのか？ 私としては、苦しんでいてくれた方が、面白くはあるが』

まがりなりにも神と呼ばれている存在とは思えない発言だ。別に期待はしていないけれど、腹は立つ。私が、姉やアキトに負い目を感じていたことさえ、こいつは楽しんで見ていたのだろう。

この地に縛られている身は気の毒だとは思いつけれど、だからといってされたことを許せるはずもない。

皆が苦しむところを見て喜ぶなんて、絶対おかしい。歴代の巫女たちは——そして、巫女姫をついだ姉は、全てを知って、今どんな気持ちでいるのだろうか。

幸せそうに笑っていたけれど、あれは、本当の笑顔だったのか。いまさら、確かめることさえ出来ない。

だったら、せめてアキトだけでも、苦しみから解放できればいいのだけれど。

「まずは、私が死んだ、という事実が必要なわけか」

『よいのか』

独り言のように呟いた言葉だったけれど、神には聞こえていたのだろう。

嘲るように笑うと、3つの目を器用に細める。

『愚かな娘。本当はあの男が欲しいのだろう？』

心の中を見透かされたような気がした。

私の心の内に、まだアキトへの未練が残っていることを、知っているのだ。

本当にいやな奴だ。

『お前は、一度我に喰われた。つまり、真実我自身の巫女になったということだ。どこへ行こうとも、それは変わらぬ。お前が望むならば、我はそなたの願いを叶え、あの男はお前のものにすることも出来る。国さえも手に入れることも可能』

国を治めるほどの器量など、私にはない。

それに、もう2年前の私とは違っている。自由に生きることを知り、仲間を得てしまったのだ。戻りたいとも、思えない。

巫女として、守られていた頃の私ではないのだ。汚いこともしてきたし、浅ましいことも平気で出来るようになってしまった。

もう私は、今の私以外にはなりえない。

「私は、アーリアよ。素性もわからないナージャ弾きの女」

『この国は、もういらないか？』

「……いらないわ。私には故郷なんてないもの。それに、彼のところに戻りたいからって、私を元に戻してくれるわけでもないでしょうに」

答えはなかったが、何かを含むような笑いで、やはり私の想像通りなのだと悟る。

この模様を消したくて、いろいろな人間に尋ねたけれど、返ってきたのは、一度神に食われて変わった姿は、神自身にさえ戻すことは出来ないという言葉ばかりだった。

「こんな姿で戻ったら、神殿はそれこそ大騒ぎになる」

長い間、神に喰われたものはいなかった。姉の方が力は強いが、やはり巫女たちにとって、神は絶対だ。私の存在を知れば、姉の代わりに巫女姫にでも祭り上げようとするかもしれない。

窮屈な神殿にも戻りたくなかったし、巫女として生きるのもゴメンだった。それに、下手をすると、神殿内が二分してしまうかもしれないわけだし。

『愚かな娘。やはりお前は馬鹿だな。だが、その愚かさこそが、我の空腹を満たすにふさわしい存在だったのだよ』

神は、そう囁いた。

『お前をあるべき場所へ返してやろう』

ぬるい風が吹いた。

風は私の髪を乱し、服の裾を巻き上げた。——まるで、私自身の体を舐めまわすように。

「あるべき場所？ それは、私が今いる場所のこと？」

『そうだ』

「いいの？」

『かまわぬ。私は別にお前に永遠に傍にいてもらいたいわけではない』

神は楽しそうに笑う。

あの時も思ってたけれど、やっぱりこの神はよくわからない。

『なにしろ、もうお前の食べられる部分は全て食べ尽くしてしまったからな』

神はまったく悪びれていない様子で、そう言った。

やっぱり、この神は好きになれない。

そのことを再確認してから、私は二度とここに戻らないことを誓った。

13・決意

楽器を弾くせいで、硬くなった掌は、暖かい。ダディルだけじゃない。眠れない夜に、握ってくれたこの手も、私を救ってくれたのだ。

そんな人たちを置いて、私がどこかへ行くなど、ありえない。

「帰ろう、リリ」

祭はまだ続いている。だから、遊んでいる暇など、本当はないはずなのだ。

「今日は、きつと昨日よりも人が多いよ」

目の前に広がる街並は、活気に溢れていて、人々の顔も明るい。

誰も水に困っている様子もないし、店先に並べられた果物や野菜も、妥当な値段だ。

この国が、間違いなく豊かになっていることに、私は安堵する。あの時、私の身に起こったことに、少しは意味があったのかもしれないと信じる事が出来るから。

神に喰われたことも、巫女であった過去も、きつと無駄ではなかった。

「あれ？ アーリア、なんだか雰囲気変わった？ それに、ベールが落ちかかっている」

言われて、ああ、とため息をついた。

この街に戻ってきてから、神経質なほどに顔を隠していたのをリリは知っている。

誰か、知った人に見られることが恐かったのだ。

でも、アキトの屋敷へ行った後から——アキトに気が付かれなかった瞬間から、何かがふつきれた気がしている。

どうせ、模様の意味を知るのは、巫女姫と一部の者だけだ。

日差しさえ遮れれば、別に顔を隠す必要もない。

「大丈夫なの？」

心配そうに尋ねるリリに向かって笑いかける。

「いいんだ。気にしててもキリがないし」

ここにいるのがアーリアという人間ならば、堂々と顔を上げていれればいい。

誰かに容姿を聞かれても、白い髪も、体を覆う紋様も、遠い異国の不可思議な風習だとも言えはいい。

「アーリアが気にしないなら、私はそっちの方がいいと思う。アーリアの顔、好きだもの」

「ありがとう、リリ」

いつもとかわらないリリの笑顔が、私の心に光を落とす。もう迷わない。

アーリアとして、これから精一杯生きていこう。

いつか骨を埋める場所が誰も知らない荒野だったとしても。

死した場所を訪れるものが誰一人いなくても。

旅路の果てで最後を迎える時に、幸せだったと恥じることなく言えるように生きぬくことこそが大切なのではないかと、そんなふうに思った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0267v/>

旅路の果て

2011年8月13日03時22分発行